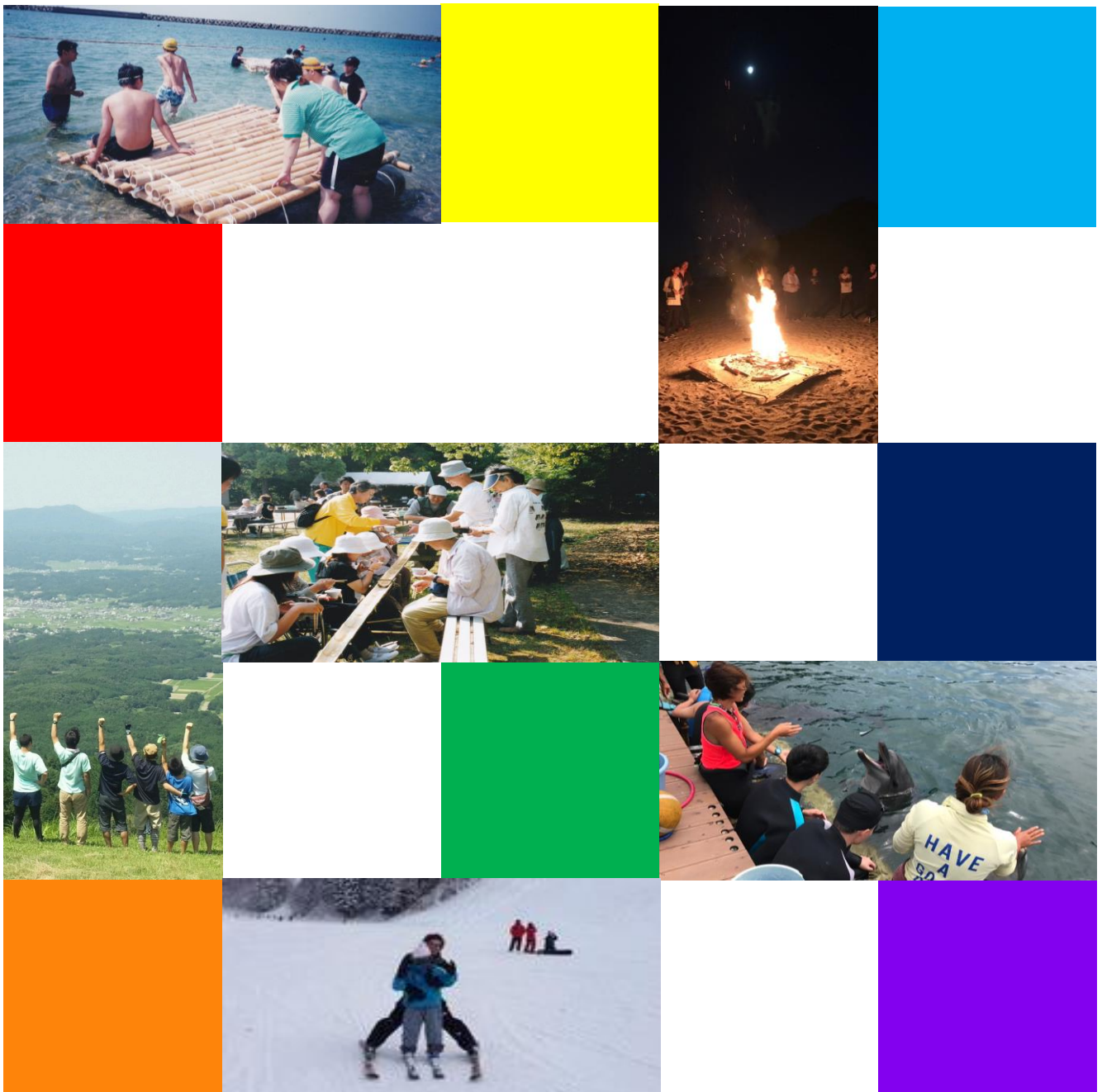
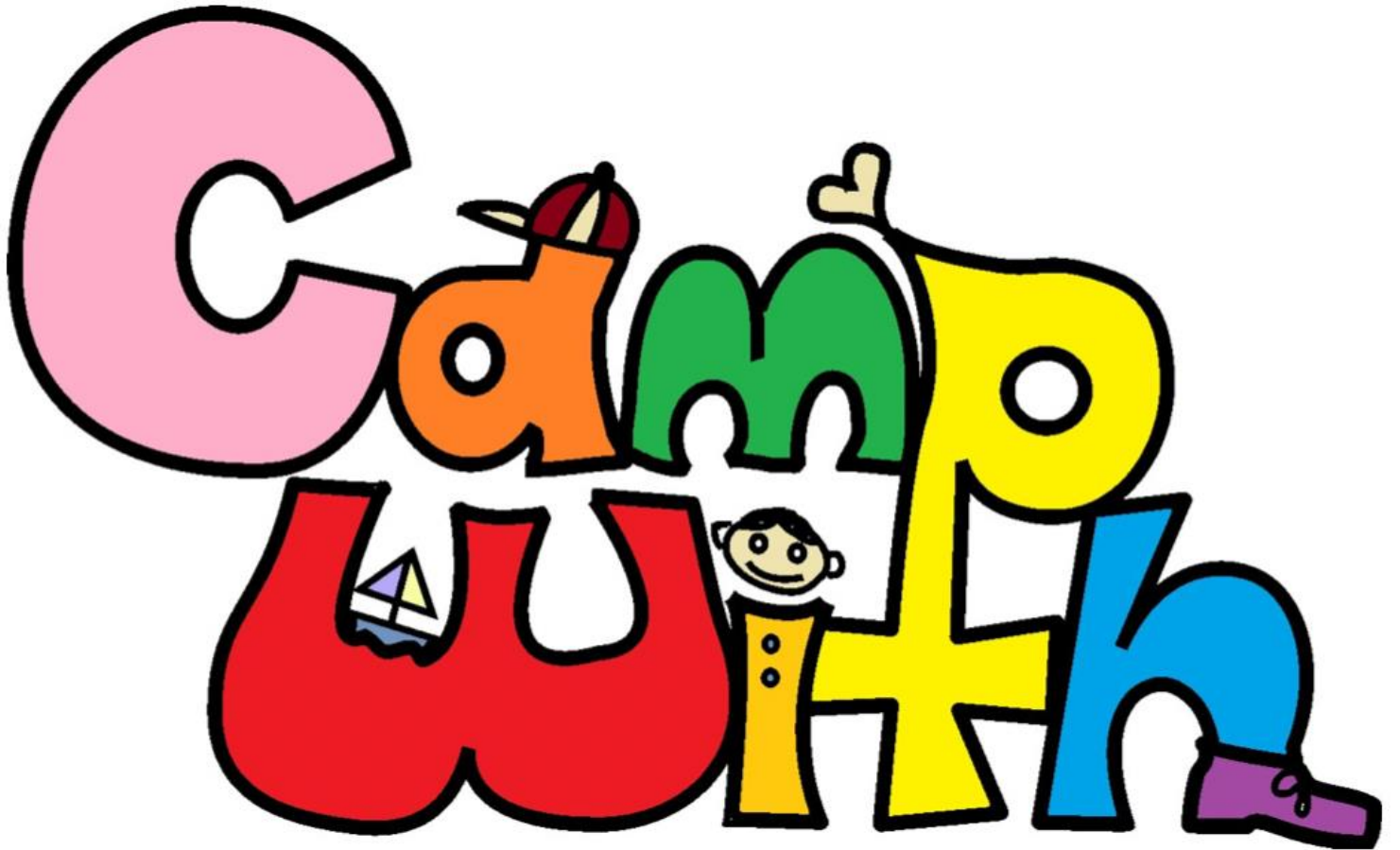


20th Anniversary

法人化20周年記念誌



特定非営利活動法人キャンピズ



~20th anniversary~

法人化20周年記念事業テーマ

さいかい

2002-2022

特定非営利活動法人キャンピズ
法人化20周年記念誌



ちょうど10年前、私はひとつの決断をしました。23年間勤めた職場を離れることにしたのです。2011年度からキャンピズの代表理事を拝命し、一期2年が過ぎようとしていた頃でした。当時、事務局があった福島区のONPプラザは2013年3月をもって閉館が決まっており、新たな移転場所をあちらこちら物色する日々を懐かしく思います。

その年の4月から夜間の大学院に通い、大学の非常勤講師の仕事をしていくつかいたただきながら、新たに移った中央区谷町2丁目にある大阪ボランティア協会のボランティア・コーディネーションデスクに事務局を構えさせていただき、そこに通う日々が始まりました。今思えば、かなり思い切った行動だったと思います。安定的な収入に決別し、不安定な「自由という自己責任」を選択し、今に至っています。われながら、よく生き延びてきたと思います。

その陰ではたくさんの人がこんな私に手を差し伸べてくださり、仕事に結びつけてくださいました。「ひとは財産」といいますが、本当にその通りだと思います。お陰でキャンピズの仕事もフレキシブルに動く

ことができました。世間では働き方改革が声高に叫ばれていますが、まさに先取りした働き方を選択したのだと改めて実感しています。

キャンピズは当初から携わる人のボランティアな意志により運営されてきました。そのスタンスが結果的に法人組織でありながら、専従職員の雇用を阻んできたのだと思います。私が代表に就任した時のキャンピズNEWS 44号でのあいさつ文の一部を再掲します。

「これまではボランティア団体としての無償性のもと、たくさんの人の無償の努力で運営されてきた経緯がありますが、これだけ規模が大きくなっていく中で、しかも、社会的な期待が高まっていく中で、無償の努力では成り立たなくなってきました。安定的な運営基盤を図るためには、事務局の独立、拠点の確保、有償スタッフの設置、人材の育成など着手しなければならない事案が次から次へと浮き彫りになってまいります」

この思いを実現するために、他団体との連携も含めた新規事業の検討を行ってきました。大手飲料メーカーや行政などからいくつかの提案もあり、現地視察や会議を積み重ねたこともありました。が、変容する社会情勢の中で、なかなかうまく進みませんでした。そんな中、理事の中から障害福祉事業を神戸市で進めたいとの提案がありました。

事業展開の試案を検討しながら会議を重ね、これまで懸案に上がっていた専従職員雇用に向けて法人として舵を切ることになりました。新規事業として立ち上げた障害者就労継続支援B型事業所は、2017年4月スタートを目指して動いていましたが、事業所として稼働していくための物件の許認可の関係等もあり、予定していた神戸市から芦屋市に場所を移して同年6月開所に至りました。4月からの稼働を予定していたこともあり、請け負った業者からの仕事は進めなければならず、準備段階の3月から6月までの間は4月から雇用が始まった専従職員と理事やキャンピズメイトの学生がフル回転し乗り切りました。

こうして、ようやく専従職員雇用が実現し、キャンピズはキャンプ事業と障害福祉事業を両輪として新たに動き出したのです。

障害福祉サービス事業所「ウィズ芦屋」は順調に利用者を増やし、法人の体制も少しずつ整備されつつありました。ところがそんな矢先、新型コロナウイルス感染症が全世界を恐怖に陥れ、キャンピズもその漆黒の闇に包みこまれていきました。2019年度のスノーキャンプを境にほとんどのキャンプ事業を停止せざるを得なくなり、キャンプを楽しみにしているみなさまの期待に応えられない日々は3か年にも及んでいます。

そして、いまだ以前のような活動の提供ができない状況にあります。それは同時に、キャンプにボランティアとして参加してくれていた学生の活動機会を奪う

ことでもありました。キャンピズのカンパは桃山学院大学社会学部社会福祉学科（現在はソーシャルデザイン学科）の学生が中心となり活動を支えてくれました。しかし、キャンピズのカンパを知っている学生はすべて卒業し、歴代の学生が20年間で紡いできたキャンプ活動の体験的引継ぎというノウハウが途絶えてしまったのです。

そこで昨年度、次代を担う学生の育成のために助成金を申請し、ユニバーサルキャンプに向けた学生研修を行いました。参加した学生は一様に活動の場を渴望していました。失われた3年は相当大きな痛手となり私たちの活動を阻んでいますが、若い学生の力は大きな希望です。このエネルギーをキャンプ活動に結びつけ、これまで通りとはいかずとも、着実に進めていきたいと考えています。

2002年9月に法人認証を受けてから20年の時を経て、今、キャンピズが活動できているのは、これまでキャンプを楽しみに参加してくださったみなさま、ボランティアとして支えてくださったみなさま、キャンピズを信頼して送り出してくださった家族のみなさま、そして、キャンピズの活動に賛同し、応援していただいた多くのみなさまのお力添えの賜物と心から感謝いたしております。

これからの10年、20年をいかに迎えるかを考えた時、安定的な経営基盤はもちろんではありますが、沸き起こる社会課題に果敢に取り組める団体でありたいと願っています。この20年間、若い世代が紡いできたキャンピズの価値を次の新たな世代にその意志をつないでいく決意を新たにし、あいさつに代えさせていただきます。

特定非営利活動法人キャンピズ
代表理事 水流 寛二



特定非営利活動法人
キャンピズ

副代表理事 則包 正人

キャンピズに関わり20年以上がたち、継続しているからこんな立場になってしまいました。当時を知るメンバーからは「えっ！！あの、のりさんが副代表？」という声が聴こえてきそうです。

ほんと無知で怖いもの知らずで、障がい者であろうがなかろうが、同じ人間なんだからやりたいことがあったら、同じことができたらいなと思って取り組んで来ました。海水浴や山登り、川遊びに、雪遊び等々キャンプを通じていろんな経験をさせてもらいました。

そもそも僕が障がいのある人と接したのは幼稚園の頃、同じクラスにダウン症の子がいました。その子を母親が「あの子は知恵遅れだから優しくしないとだめよ」という言葉に、「いいや、あの子は知恵遅れじゃない。おんなじや」と幼心に言っていたようです。僕のノーマライゼーションはそこから始まっていたのかもしれませんが。

大きくなるにつれて障がいがある人のことを深く考えるようになりました。仕事は高齢者介護の仕事をしています。皆さんいろんな背景があって生きてこられた人です。病気や苦手なこと、こだわり、得意なこともあります。

キャンピズで関わり、キャンプはあまり好きではないものの、みんなで集まって一人じゃできないことをするのが好き。一晩一緒に過ごせばみんな友達。それがキャンプでも旅行でも、一緒にいたからできた。キャンピズと関わっていたからできた。そんな思い出をこれからもみんなで重ねていきたいと思っています。



法人設立20周年に寄せて

特定非営利活動法人
キャンピズ

理事及び事務局長
梅田 純平

法人設立20周年、心よりお祝い申し上げます。20年という歳月は、数々のチャレンジや困難を克服し、成長してきたことで迎えられたのだと思います。またボランティアのみなさまの協力とご支援があってこそだと思います。

個人的には2015年度に理事として関わらせていただくようになりました。自身が大学生の頃にボランティアとしてキャンプを実施していたこと、大阪ボランティア協会で職員として働いていたこともあり声をかけていただいたかと思っています。

ちょうど大学生の頃、キャンピズの活動が始まったことを考えると、障害者やキャンプを取り巻く環境も大きく変わっています。障害に対する偏見や差別も多く、社会に参加するという事は決して多くに受け入れられていなかったと思います。制度も今ほど整っていなく、多くの障害者が社会参加するボランティアサークルが存在していました。キャンプ活動もその一環で一つの選択肢として存在していました。

現在、十分とはいえないかと思いますが制度が整い、障害があっても地域で暮らすということがすすめられるようになりました。そのような中でキャンプ活動はどんな価値があるのだろうと考えました。制度が整って外出にはボランティアではなくガイドヘルパーが付き添うことが多くなりました。それが決して悪いとは言いませんが、対等な関係で一緒に活動を楽しむことが少なくなってしまったのではと思います。20年経った今でもキャンピズのキャンプはボランティアで行われています。キャンプは協働する場面が多くあります。人と人が関わる機会が多い活動だとも思います。対等な関係で一緒に活動を楽しむことができ、ボランティアが関わる活動としてキャンプは価値があるものだと考えました。

20年の実績と経験を基に、これからもキャンピズは社会に価値を提供しつづけていくことだと思います。

改めて、法人設立20周年、誠におめでとうございませう。



公益社団法人
日本キャンプ協会

会長 平田 裕一

このたび、特定非営利活動法人キャンピズにおかれましては法人化20周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

また、これまで貴法人発展のためにご尽力されました役員の皆様をはじめ関係各位に心からお喜び申し上げます。

さて、貴法人が20周年を迎えられた期間の中には、突発的な出来事として東日本大震災に代表される巨大地震の発生や、新型コロナウイルス（COVID-19）の出現、さらに昨年から継続するロシアのウクライナ侵攻等が挙げられます。世界がグローバル化する中、地球のどこかで発生する突発的な出来事は、私たちの日常生活にも影響を及ぼすことを実感する今日この頃です。

その一方で、予期されてきた変化の一つに、日本国内での少子高齢の人口構造の変化があり、地域社会の在り方や個々人の働き方等の見直しが起きています。また、地球規模では今後の2030年を目標とするSDGs（持続可能な発展のための17の目標）の取り組みが挙げられ、産業界の発展の速度にはかなわないものの、日々の日常生活の中にも徐々に浸透してきているように思われます。

このような社会情勢の中、貴法人はこの20年の歳月の中、より多くの方々とキャンプ活動等を通じた社会福祉支援活動を行われてきました。今後においても活動の対象とされる多様な方々と共に、その活動支援に当たられる方々双方において「おもろかったなあ」「ええやん、ええやん」と喜びを分かち合える活動を継続されることが、次の世代へと伸展していく源泉になるものと思います。

貴法人におかれましては、この度の法人化20周年を契機として今後さらに多様化する社会の問題や課題、要望に対してより一層活発な活動がされますとともに、益々のご発展を心からお祈り申しあげまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



特定非営利活動法人キャンピズ
法人化20周年に寄せて

大阪府キャンプ協会

会長 永吉 宏英

特定非営利活動法人キャンピズの法人化20周年、おめでとうございます。

キャンピズがNPO法人の認可を受けたのは2002年で、大阪府キャンプ協会にはまだまだNPO団体の加盟が見られなかった頃でした。それから20年、キャンピズの加盟が一つのきっかけとなって協会には多くのNPO団体が加盟するようになり、ダイバーシティが求められる社会にあって市民活動としてのキャンプという新しい世界を切り拓いて、多様化するキャンプニーズを支えてくれています。ありがとうございます。

キャンピズの中心活動は、発達障がいを持つ子ども達を対象にした「キッズキャンプ」などのスペシャルニーズキャンプです。大阪は1953年に日本で初めての「肢体不自由児療育キャンプ」「生活保護児キャンプ」が実施されて以来、自治体の外郭団体や公共性の高い民間や企業団体が中心となって、現在のスペシャルニーズキャンプにつながる取り組みで日本のキャンプをリードして来ました。

キャンピズはNPO法人の立場でその伝統を引き継いで、幅広い市民のみなさんとのネットワークを広げながら、キャンプによる交流事業から更に調査研究事業、出版事業、指導者派遣事業、就労支援事業など、福祉事業全般へと活動の幅を広げながら積極的に活動しているとお聞きしています。

今後のさらなる活躍を心から応援しています。頑張ってください。





キャンピズ
法人化20周年に寄せて

一般財団法人
大阪市青少年活動協会

専務理事 増井 一夫

キャンピズが特定非営利活動法人として法人化され20周年を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。

そして、大阪市の中央青年センター主催事業の講座で学んだことを実践しようと、自発的な集まりからスタートしたキャンピズの、法人化を経て多種多様なユニバーサル事業を実践してこられたこれまでの取り組みに対し、深く敬意を表する次第でございます。

大阪市の「人にやさしいまちづくり」政策にともない、施設設備の改修が順次進められた信太山青少年野外活動センターでは、大阪市の直営時から事業を実施されてきました。当協会が管理運営を行いだしてからは、同様の伊賀、びわ湖の野外施設においても、それぞれ施設の特色を生かしたグループキャンプなどを実施される際に、受け入れ施設としてお手伝いをさせていただくとともに、事前打ち合わせなどの機会には職員が研修として学ばせていただいたこともありました。

この3年は、多岐にわたった活動が、コロナ禍の影響で実施が難しいことも多かったかと思いますが、20周年を機に多くの事業が再開され、これまでも増して、そして末永いご発展をお祈り申しあげまして、お祝いのことばとさせていただきます。



法人化20周年に寄せて～
“誰かと一緒に”が生み出すもの

社会福祉法人
大阪ボランティア協会

常務理事及び事務局長
永井 美佳

特定非営利活動法人キャンピズが法人化20周年を迎えられたことを心からお慶び申し上げます。

キャンピズと大阪ボランティア協会は、“一つ屋根の下”で拠点を分かち合っています。その出会いは2001年のこと。2002年4月から、お互いに「大阪NPOプラザ（ONP）」（大阪府福島区吉野；2013年3月閉鎖）に事務所を置き、2013年4月からは、現事務所の「市民活動スクエア『CANVAS谷町』」（大阪府中央区谷町）にともに移り、およそ21年のご縁となります。

特に印象に残っているのは、やはり事務所移転のとき、「ボラ協とともに」とキャンピズが言ってくれたことです。あのとき、何よりも心強く、頼もしかったです。コロナ禍の約3年間に、一喜一憂したことも記憶に新しいです。思うように活動ができないことに加え、「市民活動は『不要不急』では」という問いかけに、改めて自らの活動の存在意義を問い直す機会を得たのではないのでしょうか。

コロナ禍で誰しもが感じたであろう「人と人の関わり大切さ」。このかけがえのない価値を知るキャンピズには、「誰かと一緒にキャンプをする」、あるいは「誰かと一緒に〇〇する」という実践を通して、さらなる価値創造を続けてほしいと願っています。キャンピズに集う人々の思いを大切に、持続可能な未来に向けて、さらなる飛躍をされることをお祈り申し上げて、お祝いの言葉といたします。





スペシャルニーズ・
キャンプ・ネットワーク

代表 野口 和行

キャンピズ法人化20周年本当におめでとうございます。決して平坦な道ではなかったと想像します。水流代表はじめ関係者の皆様のご尽力に敬意を表します。

私が水流代表や石田先生と初めてキャンプで一緒したのは、30年近く前、冬の妙高高原でシニアの人たちと楽しむ雪の活動でした。関西の皆さんの明るさと「まずやってみる」力に大きな感銘を受けました。石田先生の退官キャンプでキャンピズの「聖地」信太山を初めて訪れたときも、全く同じスピリッツを感じることができました。

様々な個性のある人たちとキャンプを楽しむとき、その難しさに足を止めるのではなく、「まずやってみる」力が必要になります。しかしそれだけでは安全にキャンプを実施することはできません。しっかりした組織を作り、研修を積み、トレーニングし、キャンプを行い、評価するという基本を忠実に行うことが重要になります。キャンピズの皆さんはこれを丁寧に20年間積み重ねて、たくさんの財産を築き上げてくださいました。

スペシャルニーズ・キャンプの普及を志す私たちは、この財産があるからこそ、足元を照らされながら、その道を安心して歩むことができます。これからは、私たちもその道を照らす明かりを増やしていけるように、力をつけていきたいと思います。

「スペシャル」を「スペシャル」と考えない社会を目指し、これからも共に歩ませて下さい。キャンピズのこれからのますますのご活躍をお祈り申し上げます。



創立20周年によせて

特定非営利活動法人
子どもと遊びを育むまちづくり
プロジェクトKid'sぼけっと

副代表理事 川口 裕之

20年・・・「長かったなあ」なのか、「あっという間だったな」なのか、みなさんの大切な記憶とともに「思い」があると思います。

私達の活動とキャンピズさんの活動って、目指す頂は違うのですが、道を上る中で巡り会えた「ステキな同志」と言ったところでしょうか。水流先生をはじめ、代々の学生さん達とは、私共の宿泊行事におきましてご尽力頂いたり、時には共に火を囲み「キャンプの素晴らしさ」を夜遅くまで語り合ったことをとても懐かしく思います。

活動を継続できたからこそ味わえる感慨というもののひとつに、私はやはり「再会」があるという喜びを真っ先に感じます。10年以上前に参加した子どもが、逞しい若者に、当時学生スタッフとして、右も左もわからずとにかく一生懸命に関わり続けた学生が社会人となり、第一線で活躍したり、家庭を持って参加したり。このような再会が約束されているからこそ、「一期一会」の活動に魅力をいつまでも感じるのではないかと思います。

私達の活動が社会的にどれほど意味のあるものかは正直な所わかりません。しかし、関わったそれぞれのみなさん、参加した子ども達の人生をより豊かにする「何か」が確実に存在すると信じています。震災もありました、コロナ禍もありました。しかしそれでもブレることなく20年を迎えた「同志」に最大の敬意と「これからもよろしく」を贈ります。





キャンピズ
法人化20周年によせて

高雲寺

藤本 了勝

私は、この4月2日で満79歳を迎えます。60歳で少年院法務教官を定年退職し、敦賀市の海添いの小寺に単身で入寺しました。その寺への最初の来訪者が当時桃山学院大の石田教授でした。

少年院教官としての現職時代、少年院教育に野外活動の理論と実践を導入しようとして、石田教授の指導を受けていました。

その縁で、私が70歳に達するまで約10年間、キャンピズの活動場所として、本堂の内陣以外のすべての部屋を使用させていただきました。寺ですから広い本堂のほか、台所、座敷や二階建ての離れもあります。法人化20周年ということですから、当初の10年間、関わっていたこととなります。

私は、各部屋を開放することのほか、海岸での焚火許可を（ファイヤーのため）取得する手続きをするだけで、運営そのほかはすべてスタッフが実施していました。

手際の良い調理や積極的なゲーム指導など目を見張らせる運営でした。そのうち、門徒さん方も「何かしたい」と出発前の昼食のおにぎりを作ることになりました。そんな中で、カボチャコロケが好評だと、キャンピズ来訪に合わせ作付けしたり、コロケの数も50個程度でいいのに2~300個も前日から作るようになって、酸っぱくなるなどの始末。

「たくさん食べさせたい。」の声に抗うことが出来なくなってしまう結果を招くことになりました。「人の役に立ちたい。」とのエネルギーの強さに驚くばかりでした。一般に「社会貢献」といわれる活動の持つ危うさをも感じさせられました。

キャンプが大流行と聞きますが、家族や単独でのキャンプで、いわゆる組織キャンプとは異質な雰囲気スタッフが変容に垣間見れます。これからの課題かなとも思います。



NPO法人キャンピズ
法人化20周年にあたり

元ベネッセコーポレーション
体験学習の企画運営を担当

相澤 暁

キャンピズ法人化20周年、誠におめでとうございます。

キャンピズとの出会いは2007年でした。ベネッセコーポレーションが東京で行っていた小学生向けの体験プログラムを大阪で展開するにあたり、代表理事をされていた石田先生が依頼を快くお引き受けくださり、以降3年間、関西のキャンプをキャンピズが運営してくださいました。

学生のリーダーと子どもたちとの関係が生み出す効果への期待から、桃山学院大学の学生で組織するサークル「スマイルキッズ」を中心にした運営組織で、進研ゼミ会員を中心とする子どもたち数十人を集め、伊賀や間崎島でのキャンプを実施いたしました。

学生リーダーに対する座学と実地研修、さらに本番の前後で保護者を交えた講習会を徹底した結果、安全性の高さと子どもたちの主体性を高めるプログラムが好評で、参加者は毎年増加傾向、かつ保護者から非常に高い評価を受けておりました。ベネッセの事業は収束してしまいましたが、私自身がキャンピズとの仕事で学んだ「主体性の尊重」は今の仕事にも活かせております。改めての感謝を申し上げます。

キャンピズのこれまでのご功績に心から敬意を表しますとともに、今後のさらなるご繁栄をお祈り申し上げます。



特定非営利活動法人
あしやNPOセンター

事務局長 橋野 浩美

この度は、特定非営利活動法人キャンピズの創立20周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

法人設立後の2017年には就労継続支援B型事業所ウィズ芦屋が芦屋市にオープンしました。私どもは、このウィズ芦屋オープン時からのつながりであり、当法人が指定管理を担っている芦屋市立あしや市民活動センターリードあしやでの、貴メンバーが団体の紹介をしながら来場者に茶菓をふるまうという「ふれあいカフェ」や、中学生の職業体験「トライやる・ウィーク」で協働者として大いに活動をしていただき現在に至っています。2021年度はウィズ芦屋の活動を動画化しYouTube配信をさせていただきました。

ウィズ芦屋に足を運ぶ度に感じることは、笑顔に会える場所でもあり、利用者の皆様の心許せる良き場所であることです。これは日頃の職員の方々の心配りのたまものであると確信いたします。

さらなる10年、20年、喜びや困難、様々なことが起こるでしょうが、その中でも障がいのある人、ない人の憩いの場を提供できる団体として、未筆ながら、貴団体の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



あしやNPOセンター
特定非営利活動法人 Ashiya NPO Center



Ashiya Citizen's Activity Center
芦屋市立あしや市民活動センター
リードあしや



特定非営利活動法人キャンピズ
法人化20周年を記念して

医療法人弘清会
四ツ橋診療所

副院長 安井 博規

この度は法人化20周年おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

大阪市西区で地域のかかりつけ医をしています、四ツ橋診療所の安井と申します。キャンピズには主に医療面でスーパーバイザーとして関わらせていただいております。

私たちは最期まで住み慣れた地域で安心して過ごせるように患者さんとご家族に寄り添い、適切な支援をしています。外来診療、訪問診療、訪問リハビリテーションを通し、予防から看取りまで一貫して行っています。それだけではなく、その人がその人らしく生きられるようにするため、人とのつながりを大切にしたいと考えており、かけはしカフェという誰でも集える集まりを月に一度行っています。年齢や性別、障がいの有無など関係なく、誰でも楽しめる居心地のいい場所を提供しています。お話ししたり遊んだり、余興を楽しんだり人それぞれ楽しんでいきます。

私たちが行っているかけはしカフェで垣根のない人とのつながりを大切にしているのと同じように、キャンピズの活動も人とのつながりを大切にされています。その縁あって今回このような記念すべき会誌に寄稿させていただくこととなりました。私も実際にキャンプに参加しましたが、とても楽しい時間を過ごせたと同時に、参加されている方々が非常にいい笑顔だったことが印象的でした。コロナ禍でキャンプそのものの開催も難しい時期もありましたが、これからも皆様が力を合わせて乗り越えていかれると思います。

今後のキャンピズの益々のご発展をお祈りしております。この度は誠にありがとうございます。



医療法人弘清会
四ツ橋診療所

法人化20周年記念誌

— も く じ —

ご挨拶／祝辞

P.3

キャンピズの歩み

P.12

キャンプ事業紹介

P.36

思い出の語り場

P.39

みらいへ向けて

P.49

20周年記念デイキャンプ

P.57

資料

P.71

編集後記

P.75

キャンピズの歩み

キャンピズは、有志によるボランティアグループとして1998年に発足しましたが、活動を進めていく上で、「①活動の責任の明確化」「②活動の継続性」「③社会的地位の確保」を考え、法人化することを決め、現在、特定非営利活動法人(NPO法人)の認証を受けています(2002年9月)。

会員は、年齢、性別、障がいの有無を問わず、多くの人に参加してもらうため、正会員、賛助会員、特別会員として活動にボランティアとして参加するキャンピズメイト、キャンパーとして活動に参加するキャンピズクラブに分けていて、それぞれの立場で活動に参加しやすいようになっています。

組織は、正会員から選ばれた理事による理事会の下、事務局が会計、事業の申し込みなど日常業務にあたり、各キャンプは理事会の認めたキャンプ長(CD)の下、大学生を中心としたボランティアスタッフによって運営されています。

現在活動は、障がいのある人が同じメンバーで年間通じて少人数でキャンプを行うことで、さまざまな社会体験や人間関係を養ってほしいという「グループキャンプ」や様々な内容と日程が選べる「夏のキャンプ」、スキーや冬の自然体験を楽しむ「スノーキャンプ」、一年を通じて、四季おりおりの野外体験を楽しむ、「どきどきプロジェクト」を実施しております。

また2017年からは余暇だけでなく日常的な支援を行うべく、就労支援事業も行っており、兵庫県芦屋市にて就労継続支援B型事業所「ウィズ芦屋」を運営しております。「毎日利用したい」、「週に1日だけ」など、個人に合わせた事業所利用を提供し、あなたにあった暮らしのカタチをテーマに新たな就労スタイルを提案しています。

キャンピズは、その名のとおり誰かと一緒にキャンプがしたいというその願いから始まりましたが、現在はキャンプだけではなく様々な活動、事業を通し多くの人と共生していくことを目指しています。

※以降、今日では差別的で不適切とされる語句や表現がありますが、当時の時代背景を考慮しそのまま表記します。

1998年 ボランティア養成講座としてスタート

1998年、大阪市立中央青年センターで「ともにアウトドア体験をつくりませんか 障がい者支援ボランティア・ゼミナル」という、障がい者キャンプ支援ボランティア養成講座が、桃山学院大学 石田易司教授を中心に開かれました。

この講座が企画された背景には、1993年に策定された「大阪市ひとにやさしいまちづくり整備要綱」があります。後にキャンピズのメインフィールドとなる、大阪市立信太山青少年野外活動センターでも風呂場や自炊場の改修を計画しており、「せっかく改修する以上、何らかの形で障がい者や介護者の意見を反映させられないか」という意見がありました。そこで、障がい者にとって使いやすい施設のあり方について、ボランティアから提案を得られるような内容にしたいというものでした。



10年度		
《計画立案編》		
回	実施日	内容
1	10/29(木)	ボランティアって？ 障害者の生涯学習機会って？
2	11/5(木)	障害者のアウトドア体験談 をきこう
3	11/12(木)	アウトドア活動を企画・ 運営するには
4	11/19(木)	障害に応じたケアの方法 と救急法・応急処置
5	11/28(土) 29(日)	いっしょにアウトドア体験 をつくらう(宿泊研修)
6	12/3(木)	ふりかえり

実施内容(右写真含む)
※大阪市立青年センター発行
「ともにアウトドア体験をつ
くりませんか」より

1999年 任意団体として発足

上記講座は、多くの受講生が集まり、その反響も大きく1998～2000年の3カ年にわたって実施されました。この講座の趣旨を實踐していこうと受講生が呼びかけ、キャンピズが結成されました。CAMP WITH～一緒にキャンプしよう～と呼びかけるこのグループは、こうして誕生しました。

その後1999年には3つの障がい児キャンプ(ふれ合いキャンプ“ウィズ” inあけのべ、アリスキャンプ、キャンピズ・スキーキャンプ)を主催しました。

また、たくさんのスタッフや講師を全国各地に派遣しました。例えば、新潟県三条市で行われた日本キャンプ協会主催の第一回全国痴呆性老人キャンプ大会inにいがたや福井県での知的障害者キャンプ、高知県での障害児と健常児の統合キャンプなど、精力的に活動し、延べでおおよそ200人のボランティアを動員し、発足初年度としては大きな成果を上げることができました。



キャンプおつかいでした。
暑かったけれど、ほかに暑くなくて
おもしろかったです。みんな
おもしろい。又いつかおもしろ
い。大阪府堺市をF2.2
おもしろい。おもしろい。

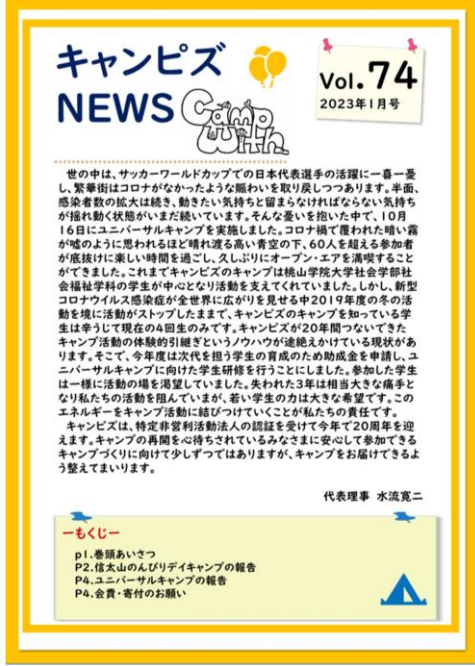


キャンピズNEWSの第1号が発行されました。キャンピズの活動の広報とともに、色々な情報を発信・交換の場となるよう、メンバーから情報を募りました。現在の最新号は74号と今でも基本的な形は変わらず、継続して発行を行っています。

キャンピズNEWS第1号



キャンピズNEWS74号



キャンピズができた訳

キャンピズ代表 石田易司

障害をもつ人や高齢者がキャンピングするには、たくさんマンパワーが必要ですが、しかし、障害者キャンピングを支援する「人」をめぐる困難は、いっぱいあります。例えば、経費をどうまかなうか、どうやって人を集めるか。その人も、どんな人でもいいというのではなく、キャンピングの技術と障害者を支援する技術やハートが求められます。でも、人の問題さえクリアできれば、キャンピングのハードの問題などの他の様々な問題は、工夫次第でなんとでもなるものだと思います。

そこで、効果的に人を集め、育てるためにボランティアグループをつくりたいと思って、いた矢先、大阪市中央青年センターから「障害者キャンピング支援ボランティア養成講座をやってくださいませんか」という話が飛び込んできました。勤務校の桃山学院短大や花園大学の学生など、たくさん若い人に呼びかけ、この講座は2カ月にわたる6回もの長い

講座になりましたが、最後までたくさんの方が参加してくれました。それで、私たちが実施してきた障害者キャンピングのスタッフと、この講座の終了者が核になって、待望のボランティアグループが発足したのです。NPO法人をめざしていましたが、それはいつのことになるかまだ分かりません。でも、そんなことはどちらでもいいのです。キャンピングの好きな人が集まって、キャンピングに行きたくても行けない人に、一人でもたくさんキャンピングに参加してもらおうことができました。そのため、大阪市中央青年センターの生駒荘太郎さんや大阪市社会福祉協議会の脇坂博史さん、関西のキャンピングの第一人者、大阪体育大学の永吉宏英教授らの協力を得て、単なる仲良しグループで終わらず、組織的に、また社会的な信用を得られる形で、わたしたちは「キャンピズ」をつくりました。

2000年～ 様々なキャンプの実践

2000年以降はこれまでに実施してきたキャンプだけでなく、様々なキャンプやイベントを実施しました。



新たなチャレンジとしてフレンドシップキャンプ2000を実施しました。このキャンプは、①障害者である私らが自らスタッフの中心になり企画する、②参加者は、障害者とかボランティアとかの概念をなくし、皆でキャンプを作る、③キャンプを行うユースホステルだけを会場と考えるのではなく、その前後にグループで活動する時間を持ち、全体を一つのキャンプであると考えするという3つの柱を立てて、実施半年前から取り組みを始めました。

新潟県三条市で行われた全国痴呆性老人キャンプ大会inにいがたの翌年、2000年には大阪にて実施。キャンピズはこの運営に協力するかたちで参加しますが、その翌年には主催事業としてシニアキャンプを実施しました。ボランティアスタッフだけで90人を超える賑やかさとなりました。



2000年までに行ったキャンプの多くは、特定の親の会などを通じて参加者を募集するという形式でしたが、多様化するニーズや様々な地域の参加したいというニーズに答えられていない点に着目し、地域を限定しない募集、短期から長期までバラエティーにとんだキャンプの実施、事前交流の場として月一回のデイプログラムの実施、ディレクターを中心としたチーム作りなど、広く一般に向けた活動へと変化していく時期でもありました。

約1ヶ月に1回のペースで実施したデイキャンプは、ハイキングであったり、参加者による屋台が並ぶキャンピズまつりであったりと、多様な企画内容は非常に好評で、スタッフを含め約80名で実施したこともありました。



実施したキャンプの一例

キャンピズ・デイキャンプin信太山(2000/04/22)	スッテンコロリン・キャンプ(2000/08/09-11)
アリス&ぱれっとキャンプ(2000/08/17-20)	ウィズキャンプinあけのべ(2000/08/15-21)
たけのこキャンプ・吹田デイ(2001/04/22)	エコークャンプ(2001/08/07-10)
ウォーターフロントキャンプ1(2001/08/11-12)	ウォーターフロントキャンプ2(2001/08/14-17)
ウィズキャンプin伊賀(2001/08/19-24)	府民の森らくらく登山道デイキャンプ(2001/10/14)

団体の基盤づくりと普及活動

任意団体として発足した当初から「①活動の責任の明確化」「②活動の継続性」「③社会的地位の確保」を考え、特定非営利活動(NPO)法人の法人格の取得を目指しており、2000年以降はより一層、団体としての基盤づくりに取り組みました。

会員の中から選出された20人程度で構成される運営委員会を組織し、事業の円滑化を図るとともに、事務局機能充実のため、大学院生を事務局員として起用し、現場と事務局との連携を強化しました。

編集後記

前回のキャンピズ ニュース7号が自宅に送られてきた時には、まさか8号の編集後記を自分が書くことになるとは思っていませんでした。キャンピズの事務仕事をお手伝いするようになって3ヶ月。まだまだ分からないことだらけで大変です。今回の編集作業も戸惑うことばかり。文章を書くということ以外、パソコンの性能を目下、学習中ですので「読みにくい紙面になっていたら申し訳ないなあ」と思っています。これから日々、努力して力を付けていく予定ですので、よろしく願います。さて、もうすぐ夏キャン本番。今年の夏はどんな『出会い』があるのか、今からとっても楽しみです。

(野津)

キャンピズ NEWS第8号

当時大学院生で事務局員を務めていた野津さんの編集後記

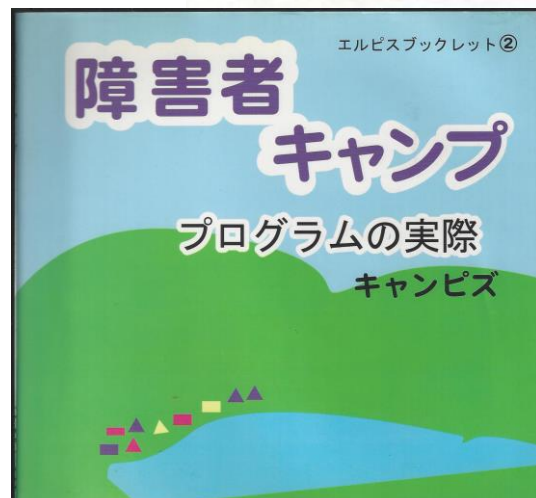
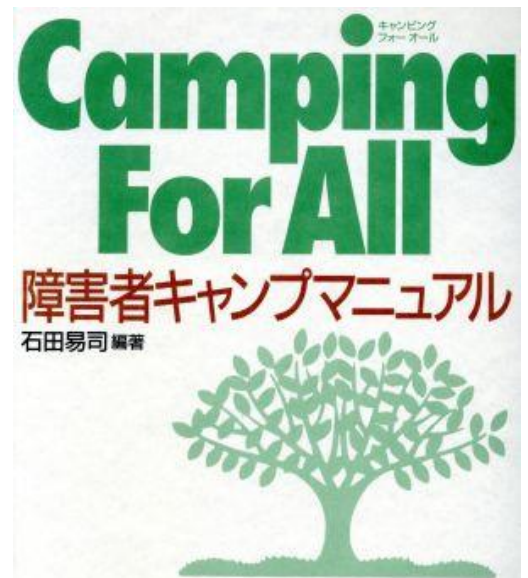
研究活動

設立当初から障害者キャンプ研究会を開くなど、研究活動にも取り組んできました。

2000年10月の「第五回国際キャンプ会議」において実践報告をしましたが、この発表後の質疑応答では、「医師は同行しないのか？」など安全に関する質問が中心で、安全がネックとなっているということを感じ、いくつかの配慮を行う事で、様々な人が安全にキャンプを楽しむことができるという情報発信が欠かせないのだということを実感し、学会や会議などへ積極的に参加し、発表の機会を増やしていきました。

2001年2月にはアメリカのフロリダ州オーランドにて開催されたアメリカ・キャンプ協会(ACA)の年次総会に8名が参加しました。発表の機会はないものの、多くのキャンプに関わる人たちが自分たちの成果を発表・意見交換している姿に刺激を受けました。

また、石田ゼミの学部生や院生を中心として、卒業論文の執筆や研究発表にも精力的に取り組み、さらに石田易司編著の「Camping For All ～障害者キャンプマニュアル～」や「障害者キャンプ・プログラムの実際 キャンピズ編」などの発刊に協力し、障害者キャンプの普及に尽力しました。



2002年 4月 NPO化に向けた運営体制の改革

2001年から広く一般にメンバー募集を開始したところ、飛躍的にその数は増え、2002年3月にはメイト(ボランティア)、クラブ(参加者)合わせて300名を超えるほどの大所帯になりました。その結果大きな運営体制改革を図ることになります。

事務局移転

これまで事務局を、桃山学院大学石田研究室に間借りをしていましたが、大阪市福島区の大阪NPOプラザ内に置くこととなりました。大阪NPOプラザは福祉や環境、教育、まちづくりなど社会の様々な課題に取り組むボランティア団体の新拠点としてオープンしました。



学生の運営への参画

従来閉鎖的な少人数で構成されていた運営委員を全会員を対象として募るとともに、学生メンバーの加入を決定しました。さらに、会員が増えるにつれ、一つのキャンプに多くの申し込みがあり「楽しく安全に」が難しくなってきたおり、トレーニングの機会を増やし制度化しました。

2002年 9月 特定非営利活動(NPO)法人認定

任意団体として発足以来、取得を切願してきた特定非営利活動(NPO)法人を、ようやく大阪府から認可を受けることができました。約4年間何度も何度も所轄庁へ足しげく出向いた末の賜物です。キャンピズの総則として以下を掲げキャンピズは特定非営利活動(NPO)法人として歩み始めました。

第1章 総 則

(目的)

第3条 この法人は、キャンプ活動を通じて、障害の有無、性別、年齢の区別なく人と人が信頼し合え、お互いに助け合って生きていける、社会を実現することを目的とする。

(特定非営利活動の種類)

第4条 この法人は、前条の目的を達成するため、特定非営利活動促進法

第2条別表

- ・第1号 (保健、医療、又は福祉の増進を図る活動)
- ・第2号 (社会教育の推進を図る活動)
- ・第11号 (子どもの健全育成を図る活動)

を行う。

(事業の種類)

第5条 この法人は第3条の目的を達成するため次の事業を行う。

- ① キャンプによる交流事業
- ② キャンプ指導者養成事業
- ③ キャンプに関する調査研究事業
- ④ キャンプに関する出版事業
- ⑤ キャンプ指導者派遣事業

その他目的を達成するために必要な事業

2002年 キャンプ活動の拡大

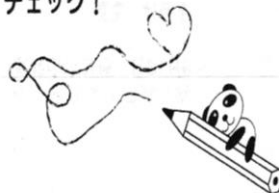
「①活動の責任の明確化」「②活動の継続性」「③社会的地位の確保」のために、特定非営利活動(NPO)法人として歩み始めたキャンピズですが、これらを真に達成するにはボランティアによる運営だけでなく、責任をもって継続的に仕事ができる有償のスタッフの必要性を求め始めます。

そのためには予算規模を大きくする必要があり、会員数増加も相まってキャンプ活動は拡大していきました。家族参加型のファミリーデイキャンプや同じ場所同じメンバーで小グループを組み、社会的スキルを学ぶグループキャンプなど新たな取り組みもスタートしました。トレーニングキャンプも含めると、キャンプ活動だけで年間に30本近い企画を行いました。

キャンピズ年間スケジュール

5月	26日	ハイホー！こやいけデイキャンプ	伊丹市昆陽池公園
6月	1~2日	キャンピズシニアキャンプ	信太山青少年野外活動センター
	2日	キャンピズ総会	大阪南YMCA
	8日	キャンピズまつり	羽衣青少年活動センター
	23日	夏期キャンプのプレキャンプ	大阪市立中央青少年センター
7月	20~21日	ウォーターフロント1	びわこ青少年の家
	25~27日	エコ-1	伊賀青少年野外活動センター
8月	1~4日	エコ-2	伊賀青少年野外活動センター
	7~9日	乗鞍登山キャンプ	乗鞍青年の家
	12~18日	ウォーターフロント2	淡路青年の家
9月	15日	デイキャンプ	星田(北摂)
10月	6日	ファミリーデイキャンプ1	信太山青少年野外活動センター
11月	10日	デイキャンプ	生駒らくらくハイキング道
12月	8日	ファミリーデイキャンプ2 クリスマス会	大阪市立中央青少年センター
	26~28日	スノーキャンプ	ハチ高原
2003年			
2月	未定	雪遊びキャンプ	美方高原自然の家
3月	2日	ファミリーデイキャンプ3	信太山青少年野外活動センター

今年の年間スケジュールです。
よく見てカレンダーを今すぐ
チェック!



グループキャンプ

5月11~12日	グループ合宿2
9月7~8日	グループ合宿3
10月19~20日	グループ合宿4
11月9~10日	グループ合宿5
11月23~24日	グループ合宿6
2月8~9日	グループ合宿7
3月8~9日	グループ合宿8 (遠征)

トレーニング合宿

6月29~30日	トレーニング合宿3	びわこ青少年の家
8月31~9/1日	トレーニング合宿4	信太山青少年野外活動センター
11月23~24日	トレーニング合宿5	信太山青少年野外活動センター
3月1~2日	トレーニング合宿6	信太山青少年野外活動センター



グループキャンプ

グループキャンプとは、できる限り同じメンバー、同じ場所、同じようなタイムスケジュールで年間を通して継続的に実施するキャンプです。

障がいのある無しに関わらず、慣れない人、慣れない場所で過ごすことは窮屈に感じます。それは、障がいがある方となればより顕著であり、待つ時間を十分にとって、繰り返すことが大切であること、スタッフも参加者のあるがままを受け入れ理解できるようにと考え、生まれたのがグループキャンプです。プログラムの内容としては自炊をし、キャンプファイヤーをし、クラフトをし、非常にシンプルな活動ですが、自分で切符を買ったり、自炊の買い物をしたり、できる限り自分でできることは自分でするなど、生活能力の向上、社会的スキルの向上を目的として生活そのものがプログラムとなっています。

簡単なようですが何ができて何ができないといったことは、すぐにわかるものではなく、年間を通して実施されるグループキャンプならではの関わりが魅力のキャンプです。

このキャンプは20年間継続され、キャンピズのキャンプの代名詞といっても過言ではないキャンプとなりました。

2003年～ 様々なキャンプの実践

メンバーが固定化し、非日常性の問題を補い、解消するために実施していたデイキャンプの役割が小さくなってきたと判断し、デイキャンプを少なくし、グループキャンプの定員を増やしました。また、チャレンジ性の強いキャンプや海外でのキャンプなど様々なキャンプにチャレンジしました。

チャレンジ性の強いキャンプ

「安全に楽しく」は当然ではありますが、多少のリスクを負っても、新しいことにトライしてみたいという欲求は誰しもあるものです。ある程度メンバーも固定され、キャンプにも慣れてきたメンバーが新しいことにチャレンジしたいと考えるのはごく自然なことです。2003年を機にバラエティー豊かなキャンプの企画が増えていきました。

ドルフィンスイムを楽しむ「イルカキャンプ」、3000メートル級の登山にチャレンジする「乗鞍登山キャンプ」、バイスキーにチャレンジする「スノーキャンプ」、10泊11日という長期間を山で過ごす「伊賀ステップキャンプ(10泊キャンプ)」など、多様なキャンプが実施されました。

グループキャンプ

2002年からスタートしたグループキャンプはこの時期、その時々ニーズに合わせて形を変えて実施されました。大阪市立信太山青少年野外活動センターでの活動をベースとし、大阪北部在住の方に向けた、吹田市や甲山でのグループキャンプ、野外活動要素(テント泊など)をより濃くし、チャレンジ要素を強くしたグループキャンプ、農作業体験など就労支援を意識したグループキャンプなど、様々なグループキャンプが実施されました。

トレーニングキャンプ

様々な障がいがある人たちが参加されるようになりました。「そんな様々な障がいがある人たちに十分支援できるの？大丈夫？」と不安を抱かれないようトレーニングキャンプを強化していきました。

キャンピズのトレーニングの特徴は「福祉的知識・技術×野外活動」です。野外活動技術だけでなく、障がい者、認知症高齢者の理解や、車いすの使い方、食事介助の方法といった介護技術などを学びます。障がいなどハンディがある方と野外活動をする場合、不都合や不便、危険や困難など幾ばくかのハードルが生じますが、「こんなハードルがあるからできない」ではなく、「どのようにすれば回避または軽減してチャレンジできるか」といった考え方ができるスタッフを育てていくためにも、基本的な福祉的な知識・技術が必須だからです。



2003年 夏 キャンピズTシャツ販売開始

キャンピズTシャツの販売を始めました。第一号は水色です。キャンピズのユニフォームとして、毎年夏キャンプの時期に配色を変えて販売しています。

キャンピズTシャツの特色は、スタッフも参加者も皆が同じTシャツを着て過ごすということです。

「Camping for All」の精神のもと、スタッフも参加者も皆がキャンパーであり、皆で作るキャンプこそがキャンピズのキャンプであるということを表しています。

でもちょっと困ったことも…。誰がスタッフなのかわからないんですが？とキャンプ場のスタッフさんを困らせたこともあります。



2005年 2月 海外でのキャンプ

オーストラリアキャンプ

2005年2月26日から3月2日の一週間、グループキャンプ参加者を対象に、キャンピズ初めての海外キャンプが実施されました。広大な大森林にはコアラやカンガルーが生息し、ガラス越しでない動物たちに大興奮。夜になれば南十字星を眺めながら、静寂な中に時折聞こえる牛たちの鳴き声をBGMにして、優雅なひと時をすごしました。また海外キャンプはその後開催されたものも含めて、単なるレジャーだけでなく現地の障がい者施設の見学であったり、キャンプの世界会議であったりと、貴重な体験も含まれており、非常に有意義な活動となりました。

このキャンプ翌年以降も実施され、最大でスタッフ合わせて総勢30名を超えるメンバーにて実施しました。これらを成し遂げることができたのは「グループキャンプ」での継続した関りによって、スタッフと参加者間の信頼だけでなく、保護者との信頼があってこそその成果だと確信しています。

えとせとら珍道中

不慣れな海外での生活にはトラブルは付き物。色々な困ったこともありました。空港でパスポートがないと学生が言い出したり、参加者さんが、入国審査場で急に寝転がったり、一番困ったのは、飛行機の中どうしても静かにするのが難しいメンバーに対して、アテンダントからイエローカードが突き付けられた時でした。サッカーだったら累積二枚でレッドカード。すなわち退場ですから、パラシュートで落とされるのかな？などあり得もないことを本気で考え、どうにかこうにか静かに頑張りました。おかげで二枚目のイエローカードは出されず、無事に到着しました。でも実際イエローカードが2枚出されたらどうなっていたんでしょうか？



モンゴルキャンプ

初めての海外キャンプから2年後、行われたのはなんとモンゴルでした。オーストラリアでキャンプ…はなんだかイメージが湧きますが、正直想像すらできません。正に毎日が未知の世界でした。

モンゴルに到着し最初に経験したのがキャンプの世界会議。その後副首相主催の歓迎パーティーが行われ、各国の舞踊や歌を披露したりしていると、知らぬ間に会場にはミラーボールが輝き、ディスコパーティーへ。モンゴルに滞在中、夕食後は毎回ディスコパーティーやカラオケパーティーへと移行していました。日本の曲で一番盛り上がったのが、SMAPの「世界に一つだけの花」でした。

キャンプ中一番の地獄だったのが、キャンプ場への移動のため約12時間のバス移動です。どれくらいの移動か聞くと、すぐといわれ2時間がたち、3時間がたち…。道なのかすらわからない舗装の不十分な道ですから、バスのタイヤが2回もパンクし立往生。トイレすらない大草原にはなたれ修理を待ちます。

しかしすごいのがみんなキャンプをしている人たち。聞いたことのあるメロディーが聞こえるかと思えば、レクリエーション大会が始まっていました。ようやくたどり着いた頃には深夜2時を過ぎており、やっと休めるのかと思いきや、歓迎パーティーが始まり、ヤギの丸焼きができました。そしてやっぱりディスコパーティーが始まりました(泣笑)

これだけ聞くと正に地獄ですが、何よりも印象的だったのが人との出会いです。遊牧民の人々との出会い、屈強なホテル警備員との偶然始まったバスケットボール大会、世界各国のキャンパーたち、話す言葉が違ってても人の温かさ、優しさ、誰かといふことの素晴らしさを改めて実感した素敵な体験となりました。



2007年 取り巻く環境の変化

設立当初は法制度も十分ではなく、利用できるサービスも限られており、キャンピズは制度内で充足されないニーズをキャンプ活動を通して支援してきましたが、2000年の社会福祉法改正以降、福祉全体が大きく発展し、障がい者福祉でも「措置から選択」の時代となり、障がいがある人たちを取り巻く環境が大きく変化しました。

さらに、当時子どもだった参加者が大人となり、キャンプに求めるものが変わってきました。作業所を利用しているなど、日常的に活動があるため、キャンプに求めるものはチャレンジ性よりも余暇、休暇といった意味合いが強くなっていきました。さらには2006年の障害者自立支援法の施行により、通所サービスのシステムが変わったため、長期の休暇を取得するという事が難しくなったため、長期キャンプの参加者が減少し、キャンプによっては定員割れを起こし中止となることもありました。

またキャンピズを取り巻く環境にも変化が現れました。これまで、大阪市の施設利用(大阪市立中央青年センターや信太山、伊賀などの青少年施設等)に関して減免制度が適用されていましたが、2007年よりその助成が打ち切りとなることから、経費面で負担が大きくなりました。この対策として、大阪市青少年活動協会あいす・おおさかとの共催が始まりました。キャンピズとしては施設利用費の軽減を図ることや、予約の優先が可能となり、活動協会としては指定管理の条件として障害者に対応していることが大事で、そのPRとなることから、双方にとってメリットのある事業として継続した関わりが始まりました。

大阪市青少年活動協会 あいす・おおさか

あいす・おおさかは、1957年に発足した「大阪市青少年キャンプ協会」を母体とし、これまで50年以上にわたって青少年の健全育成一筋に歩んできた専門団体です。「将来を担うこどもたちに、仲間とともに自然や文化にふれる中で、五感を開く場を提供することにより、行動力・生活力・創造力・判断力を養い、心身ともに健全に育てほしい」という願いをもって活動されています。

ホームページ：<https://www.ays-osaka.jp/>



あの人 は 今! ?

桃山学院大学03年生

杉本 史郎

この度はキャンピズ20周年おめでとうございます。

私が主に活動に参加していた時期は2005年、2006年の2年間です。その思い出は楽しくもあり、辛くもあり様々は感情が交差する日常では体験することができない濃いものでした。

石田ゼミの門を叩き、そこで出会った同期の3人と力を合わせて様々なキャンプに参加しました。ただ参加するだけでなく、ゼミ生&上級生ということで、いきなりPDやMDと言った中心的な責任ある役割を担いました。正直、右も左もわからない中でキャンプに携わる参加者やスタッフなど多くの方々に支えられ助けてもらいながらの日々であったと記憶しています。

3回生になり、石田ゼミの1人として当時色々と悩みながらキャンプ活動がおくってました。それまで学生生活を淡々とこなしていた下級生時代とは180度真逆の、何かに打ち込みチャレンジする中でやり甲斐のある学生生活となりました。

幸い大きな事故もなく、淡々と送っていきは経験することが出来ないような日々を送り、自分自身の基盤の一部となりました。

現在の仕事は、生活行為の全てに介助が必要な重症心身障がい者と言われる方々の介護に携わっています。大学を卒業して1つの職場で順調にキャリアをつみ、現在は管理職となりました。数えてもうすぐ丸16年となります。管理職と言っても、一般に想像するスマートなものではなく、寧ろ社会人キャリアの初めよりも最前線で身体を動かして働いているのではないかと、というくらいに激しく働いています。仕事は楽しいだけではないですが、やり甲斐があります。キャンピズで得た臨機応変力・忍耐力・コミュニケーション能力・周囲と協力する連携する姿勢等々を活かし、これからも可能な限り続けていきたいと考えています。

最後になりましたが、キャンプという非日常と、生活を支える介護という日常は一見別物に思えるかもしれませんが、表裏一体であり切り離し難いもの・双方になくってはならないものだと認識しています。

これからのキャンピズの益々の発展を祈ると共に、関わる全ての方々に感謝し今後の活動に繋げていけるよう微力ながら携わっていきたいと思います。

2008年～ 学生を主体とした運営の強化

石田ゼミや桃山学院大学の授業との連携によって、学生ボランティアの数は飛躍的に伸びました。先輩が後輩を指導するという育成体制も円熟し、仲間意識が強くなったことで継続性も高くなりました。さらに毎年、複数人が大学院へ進学しており、キャンプディレクターの高齢化と固定化が課題となっていたこともあって、大学院生を積極的にキャンプディレクターとして起用しました。

こういった背景から、桃山学院大学を中心としたチームが結成され、ミーティングなども昼休みや放課後の時間を利用して頻繁に行われるようになり、学生たちが主体的に考えキャンプを作っていくという事が定着化していきました。一方、桃山学院大学の学生に依存する形となり、他大学の学生が継続しにくいといった側面もありました。

研修の強化

ボランティアの増加に伴い、能力や質に差が生じないように、研修の強化を図りました。

これまでは広く全ての学生に向けた研修を行ってきましたが、プログラム・マネジメントディレクターとして活動する学生ボランティアが増えてきたため、その心構えや基礎知識・技術の習得・向上を目的とした研修を実施しました。さらにこれら研修の講師に大学院生を起用して「教えることは学習」を実践し、キャンプ指導者レベルの底上げも行いました。

また学生に向けた研修だけでなく、社会人に向けたキャンプディレクター研修やJリーグでの指導経験もある日本キャンプ協会の高瀬宏樹氏によるチームビルディング研修、2010年度は、独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業として、障がい児・者キャンプ支援者養成講座など、一般に向けた研修にも力を入れて開催しました。

2009年ディレクター研修

4/18-19	オリエンテーション	障害者キャンプの意義と目的	野外料理の取り組み方	野外料理の実際
	石田・西川	石田	阪田	阪田・西川
5/16-17	プログラム	障害者キャンプの組織	キャンプの計画と準備	ハンドクラフト
	前原	石田	金田	福井
6/13-14	安全とリスクマネジメント	障害の理解とアセスメント	ネイチャープログラム	認知障高齢者の理解
	水流	石田	福井	則包
7/04-05	障害者の介助	キャンプファイヤー	ボランティアと規範	評価と記録
	則包	水流・西川	石田	坂本

2008年 ニーズの変化と多様化

障がいがある人を取り巻く環境の変化や、会員の入れ替わりが始まった時期でもあり、新旧のメンバーで求めるものが異なり、ニーズが変化、多様化していきました。

グループキャンプだけでも、5つに分化し、月に3本から4本のキャンプが実施されました。また、先に触れたように長期休暇が取りにくい状況であったことや、新メンバーにとっては長期キャンプはハードルが高いこともあって、夏キャンプも伊賀ステップキャンプだけで、2泊、4泊、10泊と短期から長期までのニーズに応える形で実施されました。その他、シニアキャンプ、スノーキャンプ、日帰りハイキングなどが実施され、研修キャンプなども含めれば、年間で60回以上の実施、日数換算すると120日以上にもなりました。これだけの活動を実施できたのは、指導者として大学院生の台頭があったことが非常に大きい要素となりました。

当事者のニーズだけでなく、保護者ニーズも変化していきました。参加当初は不安もあり家で帰りを待っていた保護者が、子どもが楽しんでいる間に自分も楽しむ、休息するといった、「レスパイト(休息)」としての意味合いが非常に濃くなっていきました。キャンプ終わりに「ハワイにいったきた！」とビーチで飛び跳ねている写真を見せていただいたときには、本当にキャンピズを信頼してくださっているんだなと、嬉しくなりました。

2008年 夏 教育系企業とのコラボレーション

2008年・夏、株式会社学研ホールディングスと株式会社ベネッセコーポレーションからの委託を受け、学研は学研教室に通う児童を、ベネッセは進研ゼミ会員を対象とした宿泊キャンプを実施しました。

教育産業最大手2社とのコラボレーションはキャンピズの社会的認知度、信頼度向上につながる一方、コンプライアンスの問題やリスクの問題、教育的プログラムの組み立てなど、これまで以上に難しいこともあり、苦勞しました。

学生の言葉遣いや態度、振る舞いなどもより慎重に指導し、担当者とも何度もミーティングをし、保護者への事前説明会や振り返り会なども開催し、非常に手間暇をかけた大掛かりな企画となりました。

キャンピズとしてこれらのキャンプの経験はその後の運営に大きな影響を与えるものになりました。



2009年 設立10周年

設立当初は少数であったキャンパー・カウンセラーも、10年が経ち現在では会員数 300人を超え、キャンプ実施回数も増大し、当初と比較すると随分と大きな団体に成長することができました。これらの成長は会員の皆様なくしてはあり得ないものでした。そして、福井氏は10周年記念誌の中で次のようにも述べています。

「キャンピングフォーオール」キャンピズの掲げるテーマですが、ぼくは直接キャンプに参加する人が、どれだけ増えるか、どれだけ幅広い人たち対象のキャンプができるかということよりも、どれだけ多くの人にぼくたちのキャンプに関わってもらえるかということが大切だと考えています。

ここ数年、夏に実施している「イルカキャンプ」では、和歌山の太地社協のみなさんが、食事の場所の提供のほか、海釣りの指導や自分たちのバンドでのコンサートまで開催してもらっています。また、イルカキャンプでは、地元のバスの運転手さんに、「親戚に障害を持つ子がいて、不憫に思っていたけれど、あんたら見て、勇気づけられるわ」と言われたこともあります。

キャンプをしている自分だけでなく、その周囲の人たちにも、何らかの影響を与えているとしたら、ぼくたちのキャンプの意味はとてつもなく大きなものです。周りの人に応援してもらい、また周りの人にも、影響を与える、キャンプという活動を、今後も続けていきます。そうしたら、関わる人がもっと増えるはずですから。

こういった熱い思いを持った人たちが、たくさん集まってできたキャンピズだからこそ、非営利団体でありながらこれだけの活動を長く続けてこられたのだと感じました。この思いを絶やさずに、続けていけばこの先、40年、50年と続けていけるのではないかと思います。

2009年3月には10周年を記念して、10周年記念祭を実施しました。スライドショー、利用者がたくさんキャンピズに参加してくれている、NPO法人まんぼうによる「まんぼうショー」、交流会を行い、10年間を振り返り今後について語り合いました。

2010年～ 新たな取り組み

ニーズの変化・多様化に対応するため2008年ごろから少しずつ改革を進めてきましたが、2010年よりそのスピードを加速させていきました。

どきどきプロジェクト(2010年)

①メンバーの新規募集を広めていくことと、キャンプディレクターの高齢化問題解消のために、大学卒業後離れつつあるメイトメンバーに向けて、多くの人に参加しやすい単発のキャンプを提供すること。②従来、キャンプの端境期とでもいうべき、1月から3月にもキャンプを計画すること。③研修はシリーズ化し、どきどきプロジェクトで実施するキャンプを実践の場所として設置し、研修とキャンプを関連付けること。④従来バラバラに行われてきた単発のキャンプを集約し、チームで運営することで個人の負担や責任を分散させる。といったことを目的にスタートしました。

活動内容はアウトドアにこだわらず、温泉旅館でののんびりとした宿泊プログラムや、ぶどう狩り、琵琶湖でのカッター体験など多様なプログラムを用意しました。

この企画は大変好評を博し、定員を超えた申し込みがあり、抽選となることもありました。

竹のっ子キャンプ(2010年)

キャンピズ初となる軽度発達障がい児を対象としたキャンプです。吹田市とその周辺に住む発達障がい児で、生活自立しており、安全に対する意識がある小・中学生を対象に、吹田市自然体験交流センター・わくわくの郷にて実施されました。

キャンプ終了前に、保護者や地域の教職員、指導員などに対して石田氏を中心とした、大学教員による講座を開催し、支援や教育についての理解をより深めるとともに、お互いの情報交換など今抱えている悩みを話し合う場所となればよいというコンセプトでスタートしました。

ホームページ作成(2010年)

これまでキャンピズはアナログ志向で行ってきた広報を、デジタル化すべく、第一歩としてホームページの運用が始まりました。

あさがおキャンプ(2011年)

東日本大震災により大阪に避難してきた被災児童のコミュニティを形成し、地域での生活をより良いものにすることを目的に活動を実施しました。また親に同伴していただき、家族間でのコミュニティの形成を啓発することも目的としました。ユニバーサルスタジオジャパンやキッザニア甲子園など、さまざまな企業からの招待を受け、遠足や職業体験を行いました。

オープンキャンプ(2012年)

キャンピズを知ってもらい、入会を促進するために研修も兼ね、スライドショーやプログラムディレクター、マネジメントディレクター経験者の話を織り込んだキャンピズ紹介のキャンプとして実施しました。

運営委員会の再編成(2012年)

より学生が主体的に活動できるように、運営委員会代表を学生とし、各キャンプの学生ディレクターを中心として構成され、課題に対しより迅速に対応するために運営委員会で決議ができるよう、理事を数名配置しました。原則月1回実施され、キャンプ運営の中心となる組織として、運営委員会を再編成しました。



あの人 は 今! ?

桃山学院大学09年生

常川 浩司

私がキャンピズと関わるようになったのは、約10年前になります。障がいを持ったキャンパーさんとどのように関わればいいのか、不安がたくさんありました。

キャンパーさんに“何かしてあげないといけないのではないか”と考えていましたが、キャンパーさんが全力で楽しみ、ボランティアと一緒に頑張ってキャンプを作っていました。回数を重ねるごとに「一緒に自炊しましょう」「前のキャンプのクラフトでこんなん作ったよね」と声をかけて頂いたり、名前を覚えてもらいました。そして感謝の気持ちを持ち、「ありがとう」と自然と出てくる事が多く、“ボランティアが学ばせて頂いている”と考えるようになりました。

2回生の時にはいるかキャンプのプログラムディレクター（以下PD）をさせて頂きました。スタッフ集めでは同級生、先輩、後輩など声をかけて、たくさんの方に協力していただきました。良いキャンプを作り上げるにはPDが頑張らないといけないのでは？とっていました。たくさん会議を重ねていざ本番になり、予定通りにいかないことやハプニングはキャンプにつきものです。その中でもキャンパーさんが本当に楽しんでいる姿が見えました。どんどん雰囲気も良くなり、キャンピズの理念でもある「障がいの有無や年齢に関わらず誰もが参加できるキャンプ」とはスタッフが頑張るだけでなく、いかにキャンパーさんを巻き込んで面白いキャンプを作るのか。またハプニングがあってもそれをどのように乗り越えるのか考えるのもとても楽しい思い出です。

グループキャンプのPDをさせて頂いたときは1年間務めることになりました。どうしたらみんなが楽しめるキャンプをしていくことができるのか、会議を重ね、反省会ではもっとこうしたほうがいいのかとスタッフで話し合いをしながら試行錯誤してPDを終えました。終わりが近づくにつれて「まだまだこのキャンプが続いたらいいのになあー」と考えているといつの間にか涙が出ていました。（笑）

1年間、人前に立って進行をしたり、PDとして、キャンプファイヤー、クラフトなど、各プログラムで会議をして意見交換をしたり、とても良い経験をさせて頂きました。

実は人前に立って話をするのはとても苦手を感じています。今でも人前で話すのは緊張しますが、それでもPDを経験させて頂き、何を話しているのかは覚えています。（笑）とても貴重な経験をさせて頂き、可能であればまたキャンピズに関わりたいと思います。

2013年 利用施設の閉鎖と新天地

法人設立当初から利用してきた、大阪ONPプラザが2013年3月末をもって閉鎖となりました。さらに10泊キャンプ他、長年親しんできた大阪市立伊賀青少年野外活動センターも2014年3月末にて閉鎖となることが決定し、2013年時点で一般のキャンプ利用が停止となりました。

事務局移転

大阪NPOプラザの閉鎖に伴い、指定管理を受けてプラザ運営を担ってきた大阪ボランティア協会も移転を余儀なくされ、谷町四丁目と天満橋との間にある大手前ウサミビル(現:大手前類第一ビル)に移転することになりました。キャンピズも早くから事務局移転のために、いくつかの物件を検討してまいりましたが、帯に短したすきに長して自前での事務局移転を断念し、大阪ボランティア協会に便乗させていただくことにしました。

また、1年半空席であった事務局長を明確に位置付け、ボランティアとしてでなく、正式な雇用契約を結んで事務局体制の確立を目指しました。



社会福祉法人 大阪ボランティア協会

大阪ボランティア協会は、1965年に全国に先駆けて誕生したボランティアと職員が協働し事業を進める市民活動サポートセンターです。「ボランティア・NPO推進センター」「企業市民活動推進センター」、出版部などを持ち、誰ひとり取り残さない社会を、市民が主体的に関わってつくりあげたいと願う100人以上のボランティアと数名の職員が、ボランティア(グループ)やNPO、企業の市民活動を支援し、市民の、市民による、市民のための活動を行っています。

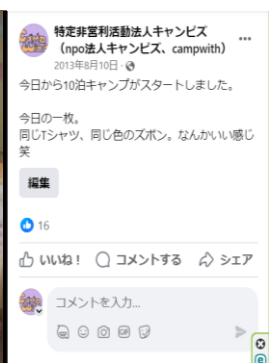
ホームページ： <https://osakavol.org/index.html>

facebookの運用開始

これまで、会員やそのご家族から、「キャンプ中の様子をもっと詳しく知りたい」「色んなキャンプがあるけど、いったいどんなキャンプをしているの?」と言った声をたくさんいただいておりますが、キャンプの様子を発信する場は近年、キャンピズNEWS(年間約3回発行)などに限られたものになっていました。

そこで、より気軽にキャンプの様子を閲覧できるよう、facebookの運用を開始することとなりました。

記念すべき最初の投稿は2013年8月10日、乗鞍で行われた10泊チャレンジキャンプの様子でした。



2014年 大阪商工信金社会福祉賞 奨励賞を受賞

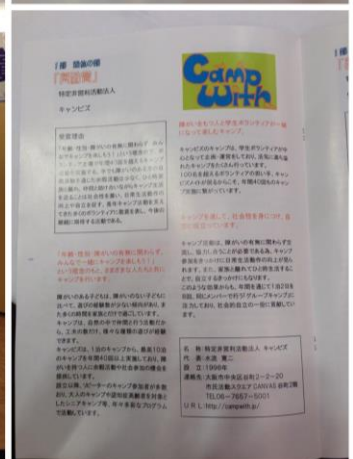
キャンピズが産声を上げたのが1998年。それ以来15年にわたり、障がいのある無しに関わらず、みんなで共にキャンプを楽しもうと、毎年続けてきた活動が社会的に認められ、評価されました。

大阪商工信金社会貢献賞 概要

持続可能な社会の実現のために社会貢献活動に取り組む団体や、社会課題・地域課題の解決というミッションを最優先に、公益性と事業性を両立させた事業、または商品・サービスを顕彰し、その活動を支援する。それにより国連で採択されたSDGsが掲げる17の目標の達成を促進し、その取り組みモデルが各地に広がることを期待するとともに、パートナーシップを通じて信用金庫が果たすべき地域社会との共生に寄与する。

※現在の名称及び概要を掲載

ホームページ：<https://www.osaka-shoko.co.jp/csr/award/gaiyou/>



2014年 消費税率の引き上げ



この年、消費税率が5%から8%へ引き上げられました。さらには2008年に起こったリーマンショック後の不景気の波は青少年活動にも影響し、共催事業等での経済的な支援は年々縮小しており、財政面で切迫する状況となってきました。

プログラム内容や食事の内容などの工夫でやりくりし、どうかこうにか凌いできましたが、根本的な解決にはなっておらず、残された選択は人員の削減か参加費の値上げの2択となりました。「安心・安全なキャンプ」これを実現するには人員は欠かせず、2002年の実施以来、値上げをせずに行ってきたグループキャンプなどの値上げを余儀なくされました。

しかしこの効果も微々たるものであり、2015年には初の赤字決算となり、これを機にキャンピズのありかたについて検討するなかで、収益事業を模索しはじめました。

2016年 6月19日 就労支援事業構想のスタート

キャンプで安定した収益を上げることが困難となり、安定してキャンプ事業を実施していくために、収益事業の検討が始まりました。キャンピズがこれまで培った知識・経験を生かせる場として、障害福祉事業を中心としてグループホームや放課後等デイサービス事業などが挙げられました。実際にグループホームの見学に行ったりと、模索する中、2016年6月19日に開催された理事会にて、阪田理事から「就労継続支援B型事業」についての事業計画書(案)が提出され、これを機会として、着々と新規事業に向けての準備が進んでいきました。

2017年 6月1日 就労継続支援B型事業所 ウィズ芦屋の開所

様々な諸手続きや改装工事などに悪戦苦闘しながらも、構想開始から約1年、ついにキャンピズとして念願の収益事業として、2017年6月1日、兵庫県から指定を受け芦屋市に「就労継続支援B型事業所・ウィズ芦屋」がオープンしました。



平野区みんな食堂ネットワーク拠点事業

ウィズ芦屋の開所と同時期、平野区から委託され平野区みんな食堂ネットワーク拠点事業がスタートしました。

平野区におけるみんな食堂の運営や開設支援を行うとともに、区内でこども食堂等やこどもの居場所づくりを行っている団体間のネットワークづくりを行いました。また、こどもの居場所作りに協力していただけるボランティアの養成や支援も行いました。



あの人 は 今! ?

こんにちは齋藤正敏（もきち） 齋藤純加（つねちゃん）です。私たちは大学卒業後もキャンパーに会いたくて活動を続け今年で10年になります。10年の間に結婚し家族も増えました。出会いのきっかけとなったキャンピズから記念誌コラムの依頼を受け今回皆さまの前でお話させていただくことになりました。

【桃山学院大学12年生 もきち(齋藤 正敏)】

キャンピズに入る前は福祉学科ではありましたが障がいのある方と関わりがなく初めは戸惑うばかりでした。その頃の私はどうしたらキャンパーが楽しいかばかり考えていてキャンプ自体を楽しめていなかったと思います。そんな中、先輩たちが心の底から楽しそうにしているまわりにはいつも笑顔のキャンパーがいました。そこでようやく私自身が楽しむことがキャンパーの楽しさにつながるのだと気づきました。現在障がい者施設で支援員として働いていますが、今の仕事でもその考え方を大切にしています。

キャンプで学んだことは楽しむことだけではありません。学生時代グループキャンプゆったりでディレクターを務め、当時うまくいかないこともあり社長に怒られたこともたくさんありました。怒られたことに腹が立っていましたが、引率者としてキャンプに参加する機会が多くなった今、ディレクターはキャンプに対してより深く考えることが重要だと理解しました。そのことを現在活動するスタッフには社長のように怒らず優しく伝えていきたいと思っています。笑

【桃山学院大学13年生 つねちゃん(齋藤 純加)】

私の兄は常川浩司です。兄の影響ではじめたキャンピズだったこともあり、周りからは“つねの妹”という印象で覚えてもらうきっかけになりました。キャンプの回数を重ね“つねの妹”から“つねちゃん”と覚えてもらえたことはとてもうれしかったです。

もともと子どもに関わる仕事がしたいと思い福祉学科に入学し、キャンピズでは学齢期対象の“さうすA”を選択しました。3年生では“チャレンジ”に名前を変えたキャンプでディレクターを務めました。そのことが児童分野で仕事がしたいとより強く思うきっかけとなり現在は児童養護施設で働いています。ディレクターとして楽しいキャンプを作る経験が職場で活かされ、行事を一から計画して子どもたちの笑顔あふれる思い出を作っています。

今は仕事に子育てと二人で協力し楽しく過ごしています。私たちのキャンプ好きが1歳の娘にもきっと伝わっていると思うので娘ともどもキャンプに現れる機会もそう遠くないと思います。その時は皆さんと私たち家族3人楽しい思い出を一緒に作りましょう。

2018年 設立20周年

任意団体として発足してから20年の時が経ちました。この20年で社会福祉は大きく変容しました。そしてキャンピズもその流れによって変化していきました。

1998年、NPO法の制定によってキャンピズもNPO法人の認定を受けます。2000年に創設された介護保険制度によって高齢者介護に注目が集まります。キャンピズはその翌年シニアキャンプを主催し介護保険では充足されにくい、余暇支援をサポートしました。2003年、支援費制度が開始され障がい者福祉の世界に選択の自由が実現することとなりました。障がいのある無しに関わらず自由に選択をするという考え方はまさにキャンピズのモットーでもあり、時代がキャンピズに追いついてきたのです。

2004年発達障害者支援法が制定し、長年福祉の狭間で取り残されていた発達障がい者の福祉的援助の道を開くこととなり、設立当初から行ってきた自閉症児のキャンプは社会的に注目を集めることとなりました。どんどん発展していったキャンピズですが、2006年の自立支援法施行により、長期キャンプの参加者確保に苦勞することとなりました。その後2013年に障害者自立支援法が改正される形で、障害者総合支援法が施行されました。これに基づき、キャンピズはキャンプの安定した運営を継続するため、財政基盤の安定を目的に障害福祉サービスとして就労継続支援B型事業所をスタートさせました。

このように社会問題に敏感に反応し、時には先行してその課題解決に取り組んできたからこそ、多くの人の共感を得て、20年という節目を迎えることができたのではないのでしょうか。

20周年記念キャンプ(10月13日～14日)

社会人を中心とした有志が集まって結成された実行委員メンバーで企画運営されました。和泉市立青少年の家・槇尾山グリーンランドにて、歴代のTシャツの展示やスライドショー、キャンプファイヤー、BBQなど盛りだくさんのプログラムが用意され、思い出話に花が咲きました。どきどきプロジェクトのデイキャンプと組み合わせて実施され、メイト・クラブ会員合わせて60名を超える参加がありました。



ユニバーサルキャンプ

従来、シニアキャンプとして実施してきたデイキャンプを2017年から、多世代交流の場となるように、ユニバーサル(すべての人に向けた)キャンプと改名し実施しました。2018年は0歳から98歳が参加し、総勢110人という大人数で楽しいひと時を信太山で過ごしました。

食事は100人前で、回鍋肉、そうめん&冷麺、中華スープ(餃子入)、バンバンジー、杏仁豆腐入りフルーツポンチ、揚げない胡麻団子、ローストビーフと豪華絢爛でした。体力測定、シャボン玉、ヨーヨー釣り、ダーツ、福笑い、あやとりなどいろんな年齢層が楽しめる選択プログラムを用意しました。



2020年 新型コロナウイルスの蔓延

この20年間で、紆余曲折はありましたが法人として順調に成長してきました。就労支援事業が始まり安定した事業展開へと向けて歩みだそうとしたその矢先、新型コロナウイルスが全世界で猛威を振るいました。緊急事態宣言という未曾有の事態に国民は困惑し、疲弊していきました。こんな世の中だからこそ、キャンプで社会を明るくというわけにもいかず、2020年2月以降すべてのキャンプの中止を余儀なくされ、1回目の緊急事態宣言の後、8月の夏キャンプ実施に向けて、参加者の皆様への感染予防対策ガイドライン等の作成も進めましたが、第二波、第三波とコロナは収まるどころかさらに世界を蝕んでいきました。

この期間にキャンピズではfacebookやYouTubeでの動画配信やキャンプ再開に向けた特別チームを結成し、オンラインでの検討を積み重ねました。

2021年 コロナとの終わらぬ戦い

新型コロナウイルス感染症拡大も2年目を迎え、日々感染対策に翻弄し、未だゴールが見えない1年となりました。法人としては、法人本部の設置・規定やルールを作成を行い、組織体制の確立を目指した取り組みを一つずつ進めました。また、雇用における環境整備も進め、2017年の新規事業スタート時の手探りの状況から比べると、少しずつですが「あるべき法人運営」に近づいた一年でした。

キャンプ事業

キャンプ事業においては、活動中の感染を危惧し、クラブ会員が参加する活動をすべて中止とし、また、若者世代への感染が広がりを見せる中、キャンプスタッフにも一層の危機感と対策への意識を持ってもらうために、四ツ橋診療所の安井医師をお招きし、メイト会員に向けた「新型コロナウイルス」に関する研修会をオンラインを併用して実施し、ウィルスとの付き合い方について学びました。さらにはコロナ後のキャンプ場はどのようになっているのか、現地視察も兼ねた研修を実施しました。

また活動再開に向け、感染者対策のためのマスクやアルコール消毒液購入費や、研修キャンプ実施費用の捻出のため寄付を募ったところ、40万円を超える寄付が集まり、活動再開への期待の高さが伺える結果となりました。

従来型のキャンプ活動を行うのが困難である故、より深く“with コロナ”を考慮した計画の検討と、クラブ会員への現実的な発信・提案の必要性を感じました。



就労支援事業

就労支援事業においては、コロナ禍によって事業収入が減少する状況があったものの、マイナスになることなく何とか一年を乗り切りました。様々な助成金申請を行い、事業運営費の補填や事業所移転の初期費用の返済もある程度カバーすることができました。就労作業では、経済活動の停滞が受注した作業に大きな影響を及ぼし、作業量と収益の確保が課題となりましたが、県からの補助金や受注企業の協力もあって被害は最小限に抑えることができました。

2022年 ウィズコロナ 再開への第一歩

新型コロナウイルスのまん延という未曾有の事態から3年が経過し、コロナとの向き合い方に理解が深まり、社会活動も活発化しました。当法人においてもこれまで完全に止まっていた事業をまずは第一歩、歩みだすことができました。真の再開はまだ先のことですが光が見えた年となりました。

しかしながら、どのキャンプも人員不足に苦しみました。Chapter.3で触れた、桃山学院大学の学生への依存は変わらず続いていて、新入生が入ってくることが当然であり、ボランティアを集めてくるということにあまり注力してきませんでした。ノウハウやコネクションも乏しく、またボランティアを教育していく仕組みや人員も十分とは言えない中での取り組みは困難を極めました。

信太山のんびりデイ

キャンプの再開は長年使用させていただいていた信太山青少年野外活動センターにて行いました。7月と8月の2回実施しましたが、2回目は学生ボランティアが集まらず、社会人メイトだけで実施しました。久々のクラブ会員さんたちとの再会に改めてキャンプ活動の楽しさ、人と関わることの嬉しさを感じるものとなりました。



ユニバーサルキャンプ

公益財団法人 電通育英会の「学生を対象とする次世代リーダー育成活動に対する助成事業」にて助成を受けて実施されました。キャンプ本番までに、オンライン面談、オリエンテーション、ボランティア養成講座、トレーニングキャンプと約半年をかけて人材の育成を行いました。

プログラム内容の企画、準備、実施までをグループに分けて行いました。学生たちは初めての体験に戸惑いつつも積極的に主体性をもって活動してくれました。コロナによる学生ボランティア不足で困難を極める中、新規のボランティアを中心として実施したユニバーサルキャンプの成功は大きな価値となりました。



法人化20周年記念デイキャンプ

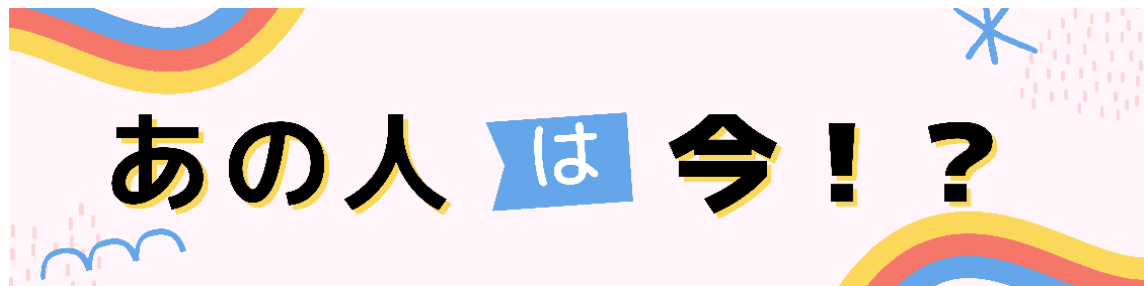
法人化20周年を記念して、実行委員を立ち上げ記念事業を実施しました。事業の一環でデイキャンプを実施し、悪天候にもかかわらず110名にご参加いただき、20周年を祝うことができました。

クラフト、音楽ブース、スウェーデントーチ、BBQなど様々なプログラムがある中、特筆すべきはキャンピズ神社でした。本物と見紛うような完成度の高い鳥居と祠。作成してくれそうなメンバーに雰囲気だけを伝え、後は完全にお任せ…。丸投げの様な形でお願いしたのですが、まさかの出来栄に、キャンピズの底力を見た気がしました。



桃山学院大学18年生

岡 貴章



20周年おめでとうございます。

私は今、障がい者生活介護の支援員として働いています。この仕事に就いたのは、キャンピズのボランティア活動と出会った事が非常に大きいと思います。

キャンピズを知ることになったのは、大学の授業でした。夏休みに5泊6日の淡路キャンプに参加することで単位を貰える授業がありました。当時の私はキャンプが好きだった為、キャンピズのキャンプの部分に引っ張られ参加したのを覚えています。私自身障がいを持っている方と関わるのははじめてでわからないことが多く、はじめは戸惑うことも多くありました。しかし、キャンプの回数を重ねるごとに障がいを持っている方々と関わり活動することの楽しさを知るようになりました。

なんとなく福祉の学科に入学し、なんとなく勉強をし、将来何をしたいのか分からなかった私にとって、キャンピズはとても刺激的な経験であり、将来は障がい者分野の仕事をしたいという明確な目標が出来ました。そこから、福祉業界で働く為に社会福祉士の資格を取ろうと考えようになり、無事に現役合格することが出来ました。

キャンピズの活動を通して学んだことは、2つあります。

1つ目は、障がいについてです。上記でもあるように、障がいを持っている方々と関わった事がなかった為、関わり方として何が正解なのか分からない状態でした。しかし、活動をしていく中で先輩方の助言もあり、障がいの特性などを知っていき、障がいとはどのようなものかを理解する事が出来ました。

2つ目は、やりがいです。大学ではサークルや部活に入っていなかった為、キャンピズの活動をしていなければバイトのみの学生生活になっていたと思います。目標を持って活動する事が出来たキャンピズは学生生活のやりがいになっていたと思います。

今こうして振り返ってみると、キャンピズの活動があったからこそ「今」があるのだと思います。私の人生を変えてくれたキャンピズには感謝しかありません。ありがとうございました。



2023年 アフターコロナ 私たちにできること ～際会と再開と再会～

2020年から全世界的に広まった新型コロナウイルスによるパンデミック。その影響は凄まじく、キャンピズにも絶大なダメージを与えました。3年間にわたり厳しい制限のある中で活動を模索してきましたが、2023年、ついに新型コロナ感染症が5類と分類されることになりました。

コロナで受けたダメージは絶大ではありますが、これを千載一遇のチャンスに際会したのだと捉え、キャンピズができることは何かを検討する時期となりました。キャンプを担う指導者とボランティアの確保、自粛中に離れてしまったメンバーの呼び戻しや新規メンバーの獲得、課題は山積みですが、ようやく宿泊キャンプを再開することができました。今後キャンピズは本格的な再開に向けて進んでまいります。時間はかかりますが、皆様とまた再会できることを楽しみにしています。

アグリキャンプ

2020年2月以降、3年ぶりの宿泊キャンプを実施しました。募集をかけると宿泊キャンプを待ち望んでいた会員さんから、多くの申し込みをいただきました。人員の問題など、大勢での宿泊キャンプは難しく、少人数となったため、お断りを余儀なくされました。お断りをした方は次のキャンプ時には優先して参加いただけるような工夫を行い、年度内で3回実施しました。

アグリキャンプの名のごとく、現地では畑で収穫作業をしたり、次年度に向けてキャンピズ用に用意してくださった場所の、草むしりをしたりと農業体験を行いました。



キャンピズキャンプ

アフターコロナにおいて、キャンピズができることは何かを模索すべく、役員メンバーを中心にキャンプディレクターの候補者、学生とその家族が集まり、1泊2日でキャンプを行いました。

コロナまん延後、会議をするのもオンラインが主流になり、その便利さも相まってなかなか実際に集まり、顔を合わせて話し合う機会が減っていました。久しぶりに20名以上の人たちが集まって、「あーでもない、こーでもない」と思いを語り合い、気が付けばそこかしこで井戸端会議が始まっていました。オンラインでは決まったテーマで、それに合わせて粛々と話し合うのみですから、このざっくばらん感は生み出せません。意外とこういうところから案外良い案が生まれてくるもの。今後もこういった機会を設けていこうと考えておりますので、その際はぜひ共に語り合しましょう。



特定非営利活動法人キャンピズ
理事及びキャンプ事業統括

西川 正人

法人設立 20 周年、心よりお祝い申し上げます。

さて、キャンプ事業部の紹介をする…というのが趣旨ですが、前章で相当詳しくキャンプの紹介をしてきましたので、ここでは、私の思いを綴らせていただきます。

法人化20周年の歴史は、私のキャンピズ人生の歴史でもあります。ボランティアとして2002年から活動を始め、事務局でも勤務させていただきました。2013年からは理事に就任し、現在はキャンプ事業部統括として関わらせていただいております。人生の半分をキャンピズの活動とともに過ごしてきて、数えきれないほどのキャンプに参加し、多くの仲間と出会い、泣き笑い、共に多くの時間を過ごしてきました。キャンピズは、私にとって間違いなくアイデンティティーの一つであり、今後の人生においても、欠かせないピースの一つだと思います。

長く活動を続けてきましたが、自分はいっつまでこの活動の第一線にいるべきなのか、そんなことを最近をよく考えます。水流代表をはじめ、諸先輩方がまだまだ現役で頑張っておられますから、何を言っているんだ、と怒られるかも知れませんが、実際のところ代表・副代表理事をはじめとして、要職に就く全員が20年選手であり、組織として先を見据えれば、どこかのタイミングでリフレッシュが必要だと感じています。必要となってからでは遅い、というの

はこのコロナ禍で痛いほど実感し、この課題に対してできるだけ早く仕掛けが必要だと考えていて、「次の世代への橋渡し」、これが私の今後の役目だと感じています。

今回、20周年記念実行委員の選定は、これを強く意識して行いました。キャンピズの活動からは離れていたメンバーを多く起用し、非常に新鮮な風を感じながら、20周年事業デイキャンプを実施することができました。そして、今回の実行委員メンバーから新たに、3名が理事に就任することとなり、私の目論見は予想以上の成果を得ることができました。私の新たな役割としての第一歩を、とても素敵なメンバーとともに踏み出すことができたこと、とても感謝しています。

さてこれを読んだ皆さん。皆さんも私たちと一緒に、新しいキャンピズを創造していきませんか。コロナ禍でこれまで築いてきた、いくつかの礎は壊れてしまいました。しかしまだキャンピズは倒れてはいません。これまでキャンピズを繋いでくれた人たちの思い、今頑張っておられる人たちの思いは、キャンピズの大黒柱の礎として、しっかりと足元を固めてくれています。壊れた礎、柱は建て直せばいいのです。時間はかかりますが一步一步着実に、前を向いて進んでいきたいと思っています。是非とも皆さんのお力をお貸しいただければと思います。



特定非営利活動法人キャンピズ
理事及びウィズ芦屋管理者

阪田 昌三

法人設立 20 周年、誠におめでとうございます。法人設立は 20 年ですが、任意団体の時から遡ると、23 年という長い時間の中で、当初は障がいがある方の野外活動支援を社会課題に向き合ってきましたが、今となっては野外、キャンプ場というフィールドで余暇を過ごしてきたキャンパー、スタッフ（学生、社会人）、子ども、その他関わってくださった方々にとって、人生の 1 ページになったことは長く活動してきた中でそれぞれ実感できたのではないのでしょうか？
そして、次は 30 周年を目指して、みなさんの 1 ページになれる活動を進めていくことを共に歩んで行きたいです。



ウィズ芦屋は、設立に伴い、約一年前から法人として新規事業を始めるにはどのような事業が望ましいのか？外部から実際に事業所を運営されている方をお招きして勉強会を開いて、たくさん質疑応答があったことを今も覚えています。そして、障害福祉サービス事業・就労継続支援 B 型の開所が理事会で承認され、それに基づく、定款の変更をスタートに事業立ち上げの準備が進みました。指定申請に関して課題が多く、紆余曲折ありましたが、2017 年 6 月 1 日兵庫県指定を受け、就労継続支援 B 型事業所・ウィズ芦屋が開所することになりました。

みなさまには応援いただき、地域の方々に支えられ、今年で開設から 7 年目を迎えることができました。この 6 年間、私たちは、就労の機会を求める方々が、誰もが自分らしく働けるよう、一人ひとりの方の支援に取り組んでまいりました。

地域の企業様とのつながりも深め、就労を希望される方々が、ステップアップ・就労の場を持つことができるよう、日々努力を重ねております。

開設から今までで、一般就労 2 名、移行支援 1 名、就労継続支援 A 型 3 名、職業訓練校へ進学 1 名と次に進まれることで、通過事業所の役割を果たしています。



日中活動のメインは作業になります。作業は4つの企業から受託し、お菓子の箱詰め、箱折、ピッキング作業。サプリメント、ペットの餌の計量・充填・シーリング作業。グミ、ラムネ等のお菓子の計量・充填作業とたくさん種類があります。

企業様との信頼関係を大切に、ユニフォームの着用、作業日報の作成等を独自に行い、商品の取り扱いに気を付けて作業に取り組んでいます。おかげさまで、企業様との関係性も良好で、利用者さんと納品に行く時に気軽に声をかけてくださる関係も構築出来ています。



今後も、地域の皆様に愛される事業所であり続けるために、より一層努力をし、みなさまに喜ばれる事業所になるよう、スタッフ一同全力で取り組んでまいります。

どうぞ、今後ともご支援・ご協力をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。





キャンピズ法人化20周年によせて

桃山学院大学02年生

辰巳 訓啓

キャンピズ法人化20周年、誠におめでとうございます。また、当法人の活動に日頃よりご理解ご協力を賜っているご利用者、保護者の皆様。また当法人の発展に尽力していただいている学生の方々、運営に携わっている職員の方々に対し、心より敬意を表し感謝申し上げます。

私が初めてキャンピズの活動に参加した時は、今の様にキャンプの種類、開催頻度、参加人数も多くなく、一から全部作る。といった時代のキャンピズでした。

参加するようになったきっかけは、授業の一環でした。選択した理由も単純で、「キャンプ出来るわ。面白そうやな。」が、始まりでした。もともと小学校から障がいがある友達がいたため、そんなに抵抗がない。と、自分では思っていたが、いざキャンプが始まり参加者と関わると、「なんだこの世界は」と、思ったのが第一印象でした。夜寝ない。走り回る。他害行動、自傷行動。今考えると、よく体力と精神力がもったな。と、感じます。しかし、よくよく振り返ると、「この人もきっと不安なんだ。」「私がここから離れたらこの人はどうなるんだろう。」そんなことを考えると、逃げ出すことは出来なかったです。

そんな思い出が、夏がくれば毎年思い出します。一番印象に残るキャンプを一つに絞ることがなかなか難しいのが正直なところ。一つ一つ、こんなことがあったな。と、記憶の片隅に今でも鮮明に存在しています。

しんどいことばかりだけではなく、それ以上に楽しい時間があります。私の場合は、石田先生の奏でるギターの音色。

特にキャンプファイヤーの火が消えかけた頃に聞こえる演奏と歌声。山から見る星を見ながらのあの空間は極上のものでした。いつかどこかのキャンプで私の子どもたちにも聞かせたいものです。

キャンピズでの経験は、私の今のキャリアにおいても大きく影響しています。障がいをお持ちの方との関わり方、障がい特性の理解、仲間との絆。など、今でも私の仕事においてたくさんの恩恵を受けてまいりました。また、人が成長する現場を目の当たりにもしてきました。それは、スタッフ、利用者関わらず皆が成長します。

現在、私は障がいがあるお子さんが通う施設で働いています。一緒に活動を楽しむ、成長を見守る。私が働く施設でその教えはしっかりと頭の中に刻まれており、考えさせられるばかりの日々を送っています。人が成長するきっかけ作りの場として、また一緒に楽しむ、普段と違う経験ができる場。今後もこのような場になり続けてほしいと思います。

書き出したら色々な思い出が、ついこの間の出来事のように蘇ってきます。社会人になり、思うように活動に参加は出来なくなりましたが、このような場に筆を執る機会を与えて頂き本当に感謝申し上げます。

末筆ながら、今後のキャンピズの益々の発展と皆様方の活躍を祈念致しまして、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。



桃山学院大学04年生

村瀬(野村) 裕美

「10泊すれば1回で終わる。しかも楽しそう。」大学1回生の春、先輩達がフィールドワークの紹介に来てくれた。友人が1人もできていなかった私は、よこしまな考えのまま誰にも相談することなく即決。しかし、この行動が良い意味で私の人生を大きく動かしたと思っている。

夏休み、ついにこの日が来た。集まったキャンピズのメンバーとスタッフ。アセスメントシートを見ながら注意すべき点、内服薬等の確認が行われる。ここで初めて私は強い責任感を感じた。ただ楽しいだけのキャンプではないということに気付いたのだ。

初めて障がいのある方とキャンプをする。キャンプ自体も初心者で何もかもが新鮮であり不安でもあった。そんな中、私が受け持ったのは小学生のT君。上手く自己表現できない彼に、私はどう接すればよいのかわからず、先輩達にアドバイスをもらいながら一生懸命に彼との時間の過ごし方を考え行動に移し、5日目には笑顔で通じ合えたことに大きな喜びを感じた。だけど、T君とはそこでお別れ。最後の2泊ではかなり自己主張の強いAちゃんについて。T君のおかげで少し自信がついたものの、相手が変われば対応も変わる。いたずらも多い、プログラムにも参加しない。何も変わらないまま2泊3日が経ってしまった。大阪に戻り、親御さんへの引継ぎ。あったことを正直に伝えよう

と思っていたが、石田先生が「10のうち悪かったことは2だけで良い。あとは頑張った事をほめてあげれば良い」と仰った。言われた通り、マイナスイメージの行動は控えて、頑張ったことを伝えたが、Aちゃんのお父様は興味を示すこともなく帰ってしまった。

「なんでだろう」障がいの有無、親子関係、石田先生の言葉。色々なことが私の心に刺さったまま10泊キャンプが終わっても、終わることができなかった。言葉では表現しきれないほどの大きな達成感と共に、自分の中ですっきりしない『何か』が、その先も続けていく原動力になった。それからというもの、子どもからお年寄りまでキャンプ対象も幅広く参加し、10泊キャンプはPDという立場も経験させてもらいながら4年間続けてきた。そして今、2児の母となり、高齢者のケアマネジメントの仕事をする傍ら、新たにキャンプボランティアの立ち上げに携わり活動を続けてきている。

キャンピズの活動を通しての、多くの経験や出会いが今の私を造っている。先日は懐かしい顔ぶれで集まる機会を作っていただき、またこのような記念誌掲載にお声がけ頂き、大変ありがたく思う。これから先もキャンピズとともに歩んでいきたい。

キャンピズの思い出

私や所属する児童支援ボランティアサークル「スマイルキッズ」スタッフは、実はキャンピズに所属しておらず、大学2回生になった際に、石田教授に声をかけていただき、キャンピズで新たに「ベネッセ」が主催で「子どものキャンプ」を行うこと、キャンピズとスマイルキッズと大阪教育大学の学生で、取り組んでほしいと言われました。

今を振り返れば、よく二つ返事で「やります！」と言ったものだと思います。若く怖いもの知らずだったと思います。

ベネッセキャンプでは、まったく自然に触れたことのない子どもや、親御さんから離れて生活したことのない子ども、キャンプが初めての体験の子どもがほとんどであり、個性豊かな子どもたちを我々がどうサポートしていけるか、不安でした。

しかし、そのような不安とは、関係なく子どもたちは力強く、とても楽しそうにプログラムに取り組み、キャンプで大きく成長する姿を見せていただきました。スタッフもキャンプの毎日が学びであり、そして子どもたちを通じてこちらも成長した素晴らしい経験を与えていただいたキャンプであったと思います。

最後に、私や我々スマイルキッズを温かく迎え入れていただいたキャンピズの石田先生・先輩・同期・後輩の皆様に感謝いたします。

桃山学院大学06年生 北田 大也



キャンピズでの思い出

キャンプ初日から、いつも通りの自分を見せてくれるキャンパーさん。すぐに周りと溶け込むことができる空間を作ってくれたことをよく覚えています。そして、そこが皆さんの素敵な所だとすぐに感じる事ができました。

学生生活は友人とキャンプの話や、最近あったキャンプでの出来事、次はどんなことがしたいかなど、たくさん話をしました。

キャンプは、自炊やレクリエーションなど盛りだくさん。次は何をしよう？と考える時間や、何かを皆で協力しながら作っていく瞬間は必死。今ではそれも素敵な思い出の一つです。

またキャンプの夜には、先輩からどう思った？と問いかけられることが多く、高校を卒業したばかりの自分は、戸惑いながら話をしていたのを覚えています。

当時、キャンピズは学生を中心とした法人でした。しかし、学生生活では中々得ることのできない経験を通し、仲間と切磋琢磨しながら自分自身を成長させる場だったと思います。その経験を友達、先輩後輩と共有できたことが私にとっての素敵な思い出で、私の力になりました。

桃山学院大学10年生 高木(石橋) 佳代子



キャンピズの思い出

この3年、新型コロナウイルスの感染で様々な行動が制限され、キャンプも例外ではなく、これまで通りのキャンピズの活動にしばらく参加できませんでした。でも今回寄稿のお話があった時、一気にキャンピズの思い出が湧き出てきました。

この度は法人化20周年おめでとうございます。息子が18歳の時にキャンピズと出会い長くお世話になっています。自閉症の息子が海に山に、大自然の中でスキーやイルカキャンプを楽しみ、協調性を育んできましたことは、キャンピズの集団の力のおかげです。さらには一度は体験させてやりたかった海外キャンプにも2回参加することが出来ました。

何をするにも「人」とのご縁が一番大事と言いますが、石田先生はじめ、多くの先生方、そして明るく楽しい学生スタッフの信頼できる皆さんとの出会いは何よりの財産だと感謝しています。こんな素晴らしい「キャンピズ」のファンとしてますます応援し、さらなる発展を心からお祈りいたします。

浅野 洋平(母：万里子)



20周年おめでとうございます。キャンピズとの出会いは、高行の学校卒業後の余暇を楽しむプログラムはないか探していたおり、キャンピズの事を知り連絡しました。説明会があり、毎月の1泊キャンプ、夏の10泊キャンプ、冬のスノーキャンプ、海外での共生キャンプ等のお話を聞きました。卒業後、キャンプやスキーから遠ざかっていたので高行は大変喜びました。年度始めの5月から始まった1泊キャンプから参加する事になりました。

いつもどんなキャンプでも、参加するにあたって親として気になるのは、スタッフの方々の力量？特に年度始めは新入生のスタッフさんが多く～この方にお任せしても大丈夫かしら～(ごめんなさい)なんてよく心配し、まあ何とかなるでしょうと自分で納得させ送り出していました。本当に頼りなさそうで・・・(申し訳ありません)

でもその新人さん達、夏キャンプ、冬キャンプ終える頃には見違えるように成長なかって頼もしく変身していました。新人さんが成長していく姿を毎年みるのも楽しみでしたし、それに伴いキャンピズの母体も盤石になっていったように思います。

ずっとそれが継続してキャンピズが20周年迎えられるのだと思います。コロナ禍で、活動が制限されましたが、ぜひ復活して、以前のように活気あるキャンピズにと願っております。

なかなか経験出来ない色々なキャンプを親子共々体験させてくださったキャンピズに深く感謝します。

辻 高行 (母：勢津子)



思い出の語り場：キャンピズクラブ編

私は、小学校5年生の時にキャンピズに入りました。

高校生の時にスタッフにならないかと言われ、スタッフとして会議に参加したり、いろいろな遊びや、火おこしをしたりしました。

最初は、火おこしが一人でできるのかなと不安も、ありました。でも、スタッフさんから教えてもらいなんとか一人で火おこしができるようになりました。私は、キャンピズのこと大好きです。

楽しかったことは、皆さんとお泊りしたり、ゲームをしたり、ご飯を作ったりしたこと。大学生のお兄さんやお姉さん達と仲良くなって、いろんな話ができ、嬉しかったです。

キャンピズのスタッフとして活動させてもらったことは、忘れられない大切な思い出です。ありがとうございました。高校を卒業して、お仕事が忙しくなり、なかなかキャンピズにも参加できなくなってしまいました。

またキャンピズのスタッフとして遊びに行けたらいいな～と思います。

浅野なつみ



キャンピズ法人設立20周年、おめでとうございます。

僕が初めてキャンピズに参加させてもらったのが、38才だったので還暦を迎えた今から22年も前のことだったと思うと大変感慨深いものがあります。

障がい者スポーツ施設で知り合った子達のお母さん方からキャンピズを教えて頂いて初参加させてもらったのがきっかけで、それからキャンピズにドハマりしました。恥ずかしながら、遅い青春を謳歌していました。

キャンピズに参加するようになってから、今までとは打って変わって外出するようになりました。キャンピズと出会ったからこそ、自分の隠れた才能（大袈裟？）がわかったし、ドルフィンスイムやスキー、オーストラリアの海外キャンプにも参加して現地の様々なアクティビティに挑戦したりと、予想もしなかった自分のアクティブさに自身大変驚いています。

キャンピズで経験したことは間違いなく、僕の人生の糧となっています。今では、「バンジージャンプに挑戦したい!」「スカイダイビングに挑戦したい!」等の夢を持てるようにすごく前向きになれました。

年齢や体力・体調の変化もあるのですが、コロナ禍で外出を控えたこともあり、今はキャンピズ参加は難しくなりました。でも、僕にとってキャンピズは自分の人生の中で欠かすことの出来ない存在になりました!

このところのコロナ禍の影響でキャンプスタッフの学生さん不足の話も耳にしています。僕がキャンプで楽しんでこれたのは、キャンピズという場所があったことは勿論ですが、なんととっても学生スタッフさんや社会人スタッフさんが沢山居てくれたからこそだと思っています。

スタッフさんが増えてくれること、キャンピズのこれからのご発展をお祈りします。

バヤシ



思い出の語り場：キャンピズクラブ編

法人化20周年おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

振り返りますと、娘の恵理佳も小学校から参加させていただいておりますので、はや10年以上経ちましたでしょうか、少しでも社会生活になじめたらと思い参加させていただきました。最初の頃は慣れない事もあったと思いますが、回数を重ねるごとに、慣れてきて毎回笑顔で帰宅しておりました。

思い出が多すぎて、語りつくせませんが、キャンピズが大好きでスタッフさんの名前もすぐ覚えて、私達のわからない名前も次から次へと出てきます。スタッフさんの撮って下さった写真を見ますと満面の笑み、楽しそうな様子、本当に感動しました。

一日でも早くコロナが収束し楽しいキャンプに参加出来ますことを親子共々願っております。

山本恵理佳/父・母



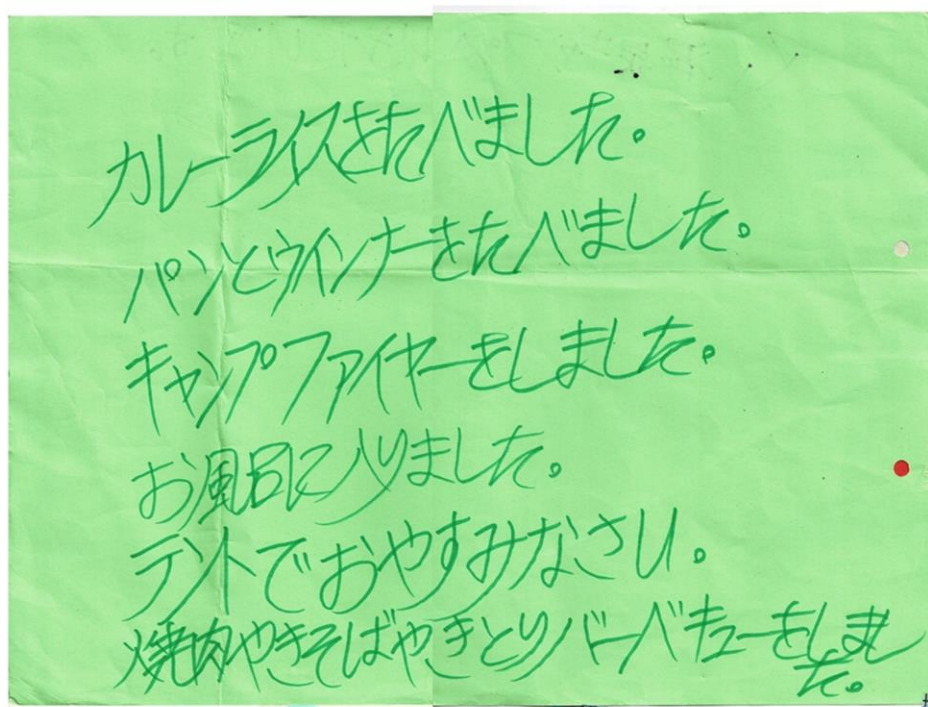
思い返せば、当時、通っていた小学校から子供が信太山キャンプの案内の用紙を持ち帰ってきて、「これだ！」と迷うことなく早速、申し込んで参加させていただいたのが始まりでした。

休日に時々家族から離れ、又、別の世界観でキャンプスタッフ、学生さん、キャンパーの皆さんと一緒に自然とふれ合い、関わりながらバーベキューやキャンプファイヤー、テント泊、レクリエーションのゲーム等、歌を歌ったり様々な体験を通していい刺激を受け、共存し合い、つながれることがとても貴重で大変うれしく思いました。

子供が毎回、キャンプの案内状を見つけるなり、すぐに開封しては心待ちに。特に温泉キャンプの時は、心ウキウキでした。どのスタッフ、学生さんもどうしたら心穏やかにキャンプに参加できるか、好きな文字や絵で分かりやすく、視覚から説明したり、好きな歌を一緒に歌って楽しんだり、落ち着きがないときは自然を満喫しながらリラックスできるように工夫して関わりを持っていただいたりと、親子共々、キャンプを体験しながらキャンプスタッフの方々との出会いを、つながりを通して多くの学びや気づきがあったこと、子供の青春時代をたくさん彩ることができたことにただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

近年コロナ禍で活動に制限があったりで大変だったことと思います。これからも親子共々、お世話になりますし、応援しています。

池田憲弘(母：加津子)





特定非営利活動法人キャンピズ

元代表理事 石田 易司

始まったころのキャンピズ

1. アサヒキャンプを卒業しました

私は朝日新聞が主催するアサヒキャンプというところで、約30年ほどキャンプ事業に取り組んできました。元気な青少年はもとより、障がいの子供も、精神障がいの大人、認知症高齢者など、本当に様々な人とキャンプを楽しんできました。キャンプをすれば認知症が治るとか自閉症が治るとかという発想でなく、年をとってもでも車いす生活でもキャンプをすることによって毎日の暮らしが楽しく豊かになると思っていたのです。

ところが阪神淡路大震災の後、世間ではNPO法ができ、社会福祉の基礎構造改革によって介護保険法や障害者自立支援法ができ、不況の社会の中で福祉というそれまであまり注目されていなかった産業が脚光を浴び、全国の大学に社会福祉の学部や学科ができ、私にも教員として来ないかと声がかかったのです。それで1998年3月末でキャンプの仕事から足を洗い、その年の4月から桃山学院大学の社会福祉学科の教授になりました。

ところがキャンプのない暮らしなど考えられなかったのと、キャンプをすれば、その支援にあたる学生が育つという信念のもと、大学でもキャンプをすることになりました。

2. 行政も同じことを考えていました

そんな時に、大阪市の教育委員会が障がいのある子どもたちのキャンプを支援するボランティアの講習会をするので、講師としてきてくれないかと、声がかかりました。自分のやっていたことを棚に上げて、担当者に「そんなボランティアはいないだろう」といったのですが、その担当者がこう言ったのです。

「私は学生時代、筋ジストロフィーの姉弟の介護のボランティアをしていました。キャンプに行きたいね、と彼らは言っていたのですが、そのノウハウもないし、経験も支援者もお金も何もかももない中で、その姉弟は亡くなってしまったのです。公務員になり、自分が立てた企画を実行できるようになれば、ぜひ障がい者キャンプ支援ボランティアの養成講座をしてみたいと思っていたのです。」

その人がずっとキャンピズの監事をしてくれている生駒荘太郎さんです。その思いを受けて、ひと月1回、6か月にわたる講座を開講しました。すると、部屋の大きさの関係で最大50人しか受講できない講座に、なんと80人もの申し込みがあったのです。

その講座の最終回、10人の知的障がいの人と一緒に、大阪市立信太山野外活動センターで1泊のキャンプを実施しました。終わった後、荷物の片づけに大学の研究室まで同行してくれたメンバーがいました。この人たちが発案して、講座だけで終わらせず、実際にキャンプをしようとしたのが「キャンピズ」です。

3. 信太山がホームグラウンドになりました

自分たちのキャンプ場を持つことなど考えられないキャンピズは、大阪市立のこのキャンプ場を借りてキャンプをすることになりました。生駒さんとの縁もいいタイミングでつながったのですが、信太山がいろいろ便宜を図ってくれたのもキャンピズにとってはラッキーなことでした。1年目のゼミ生だった小柳敬明さんがここでアルバイトをしていたことも一つの縁でしょうが、大阪市が「人にやさしいまちづくり条例」を作り、野外活動施設といえどもバリアフリーにしなければと思ってくれたことが何より大きな縁でした。桃山学院大学卒業生だった火縄吉和さんをはじめ、運営に当たる大阪市青少年活動協会の皆さんには本当にお世話になりました。障がい者キャンプの普及に協力を惜しまず、主催事業並みに先に予約を入れてくれたり、料金を配慮してくれたり、何のバックアップもない私たちにとってはまさに恵みの神になってくれました。

4. 保護者の方の協力も欠かせません

支援ボランティア、キャンプ場は確保できたのですが、何よりも大切なのは参加者です。

桃山学院大学で教鞭をとる前、キャンプ事業をしながら、私は平安女学院大学で非常勤講師をしていました。その関係で高槻市の知的障がい者の親の会に声をかけ、キャンプに参加してもらうことになりました。最初1泊から、次に3泊のキャンプをし、3年目からは1週間のキャンプも実施しました。宗本雄二さんたち現在も比較的高齢の参加者に高槻の人が多いのはそういう理由です。

3泊のキャンプをした時、20人ほどの参加者のうち3人の保護者の方が迎えに来られませんでした。電話をすると、「えっ、もう帰ってきたの」と、帰ってくるのを忘れていたとのこと。昼寝をされていたり、子どもがいるとできなかった部屋の模様替えをされていたり。そして「来年は1週間のキャンプをしてくれませんか」という声。「絶対にいけないと思っていた海外旅行ができるかも」と。そして翌年お母さんたちが集まってシンガポール旅行を実現されました。

障がいを持った子どもの楽しい日常だけでなく、キャンプは保護者にとっても大切なレスパイトになることを実感しました。この人たちにだったら任せられると、保護者の人たちが安心して私たちのキャンピズに子どもたちを委ねてくださったのです。

5. そうして10年たちました

たくさんの人に支えられて、私は10年間、キャンピズの代表をさせていただきました。

措置という制度があって、福祉の仕事は行政が厳しい監視のもとにお金を出してするものだというのが、1951年にできた社会福祉事業法に基づく戦後の福祉の体制です。福祉の仕事は国家の責任で行うので、行政組織かその代行をする社会福祉法人がするものでした。1998年にできたNPO法は、市民の主体性、ボランティア精神を大切に、国家に依存しない福祉の方法を作り出すものでした。2000年の社会福祉法は多くの事業で措置を否定しました。

だから、代表としての私は経済的に自立した組織体にするために、必要な経費はこの考え方に共感する人の会費と、参加費で賄うべきだと考えていたので、行政や支援団体からの補助金や助成金は一切受け取りませんでした。いいキャンプをすれば、多少高いお金を払ってでも参加する人は必ずいると思っていました。そして、実際、たくさんの方々が共感してくれ、たくさんの方々が障がいを持つ人が参加をしてくれました。

一方で、支援者の態勢を厚くすればするだけお金はかかります。医師や心理士などの専門家に同行してもらえれば、私たちの負担は減りますが、お金がかかります。ほぼマンツーマンの態勢を作るためには学生ボランティアを集めるのも大変ですし、その経費も組織にとっては大きな負担になります。

金銭的にボランティアに報いることはできないけれど、彼らに負担はかけたくないと私は思っていました。海外でのキャンプなどを除けば、キャンプに必要な経費は組織が負担すべきだと思ってきました。その見返りは彼らの成長と良い仲間を作ることでした。

6. 法人化20周年万歳

おかげで、キャンピズそのものは25年も、法人化して20年も継続する事が出来ました。そして、この20年の記念行事も、信太山という場所で、かつてのボランティア学生のOB,OGたちが計画し、運営してくれました。この記念誌も同様です。

私自身は後期高齢者になり、もう山を登る元気も若者と一緒にテントで寝る勇気もありません。お酒なしで一晩を過ごすこともできません。でも、次の10年も20年も、育った若者たちが担ってくれるに違いありません。キャンピズは続いていくに違いありません。

そのことに深く感謝しながら、20年を噛みしめたいと思います。



特定非営利活動法人キャンピズ

元代表理事 福井 玲

キャンピズ法人化20周年に寄せて

キャンピズが、NPO法人格を取得して20年になった。「もう、そんなに!」と言うのと「まだ、そんな、もんか?」と言うのが、自分の中で、半分、半分の気持ち。そして、法人格、取得のための作業は、ほとんど一人でしていたし、法人格の認証が降りた時も「ついに」とか「念願の」といった、感じはなかったし、比較的、淡々と当時のメンバーも受け止めていた印象があるので、記念をという声に正直戸惑いも感じた。

しかし、昨年60歳を迎えて、職場を定年退職した。いろんな意味で人生の節目を迎えた、この段階で、キャンピズと過ごした日々を振り返りたい。

キャンピズとして過ごした、日々の中で、記憶に深く残っているのが法人認証のための様々な作業と、参加者もスタッフも楽しむことができるようにと考え続けたキャンプの企画、実施だった。法人化へ向けての経過は石田先生の「定年後のボランティア」の中で報告させてもらっている。今、改め

て読み返してみて、当時、自分が何を考えていたか再確認できた。仕事をしながら、何度も大阪府庁に足を運ぶのは、かなり負担であったし、思うように時間が取れず、認証までに時間がかかってしまい、周囲の人たちには、「なぜ、こんなに時間がかかっているんだ?」と思わせてしまったことを申し訳なく思うが、自分としては、設立趣意書、定款などの文言を考えていくのは、自分の頭の中のイメージを文字という形で具体化していく楽しい作業でもあった。

法人の認証を受ける前から、キャンプは実施していたが、参加者集めには、さほど苦労することはなかった。しかし、ボランティアスタッフの確保には苦労した。「障がいを持つ人と、キャンプをしませんか?」の誘いだけでは、なかなか、ボランティアをしようという人は、集まらなかった。ひどい時は、キャンプの前日まで、電話してボランティアを探すということもあった。

ボランティア自体も、参加することで、ワクワクするような体験ができないかと考えたのが、和歌山県太地町でのイルカキャンプだった。自分自身の子供の頃の夢、イルカと泳ぎたいを実現できる場所があると知り、この企画を考えた。ボランティアの確保には、困らなくなったが、宿泊場所、交通手段、食事が常に課題が付きまとった。しかし、太地社協のみなさんや、潮岬青少年の家のみなさんの協力で一步步解決し、キャンプとして充実して行えた。一度、海でのプログラムを終えて、宿舎へ帰るバスの中でスマホから緊急地震速報が流れたことがある。どうしようと青ざめた瞬間、誤報であるとのアナウンスがありほっとしたが、参加者もボランティアもぐっすり眠っていて、気づくものは誰もいなかった。それは、それで幸せな時間だったかも？

イルカキャンプと並んで取り組んだものが、甲山でのグループキャンプだった。阪神間で生まれ育った僕にとって甲山は小学校の遠足をはじめとして、身近なアウトドア体験の場所だった。そこで季節に応じた様々なプログラムを実施した。お花見、ホタル狩り、もみじがり、芋掘り。このキャンプを実施する中でボランティアの学生たちと、僕との関係性に悩むことが多々あった。年齢差は親子ほどあるし、学校の先生ではない。あくまでキャンプの時だけの付き合い。コミュニケーションに悩むことは、僕だけでなく学生側にもあっただろう。あるとき、キャンプ中のミーティングで、キャンプ終わってから、反省会も兼ねてみんなで飲みに行きませんか？と提案を受けた。異論はない。知り合いの店が格安の値段で引き受けてくれた。甲山キャンプは飲み会までの形で定着していった。

仕事をしながらのキャンピズ生活は、正直、負担もあった。仕事や家族の用事でタイトな思いもした。そんな中、石田先生が代表を退かれる際、後任は誰に？という話になった。配属先によって、環境がガラリと変わってしまう、公務員を続けながらでは、無理があるのはわかりながら、代表をやりたいと言ってしまった。そのことで、また、周囲のみんなに心配と迷惑をかけてしまったことを改めて、ここでお詫びしたい。

キャンピズでの日々は、ボランティアとしての限界への挑戦だったように思う。参加者、学生ボランティアをはじめ、周囲の人たちの助けで、充実した日々を送れたことに感謝したい。その一方で、自分で育んだ、イルカや甲山のキャンプを次世代に引き継ぐことができなかった自分の力不足を残念に思う。



キャンプは人生を変える

特定非営利活動法人キャンピズ

理事 金本 拓也

ぼくが大学1回生の頃、大学の授業にはあまりいかず遊んでばかりいて、1回生の終わりに128単位中26単位しかとれていませんでした。おさきまっくらな中、キャンピズメンバーがキャンプの話をするじゃありませんか。「楽しそう、ここにいったらなんか変わるかも」と思い、夏のキャンプに参加しました。

最初は衝撃の連続でした。障がいのあるキャンパーと一緒にキャンプに参加したのですが、急にどこかへ行ってしまったり、全然ごはんをたべなかったり、話し言葉は伝わらなかったり、夜は寝なかったり等々いろいろありました。

そんな中、キャンプを重ねるごとにキャンパーが食べれなかったものが食べれるようになったり、夜が寝れるようになったり、こちらのいったことをきいてくれるようになったりと変化していく様を間近でみて、親に「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えられた時は達成感というのでしょうか、心の中でガッツポーズしていました。

それからもっと障がいについて知りたいと思うようになってからは、ぼくの生活は一変しました。一番驚いたのは大学の講義です。自閉症について講義があったのですが、これまでまったく興味なかったのですが、前のめりできくようになり、自分で教科書をあけるようになったのです。

おかげさまで2回生から4回生まで単位はフルでとることができましたし、先輩後輩関係なく気軽に話せる多様な仲間たちも増えました。障がいのこと、キャンプに対する探究心はとまらず、大学院にもいきました。就職先も障がいのある方の生活を支援する現場を選びました。支援員をしつつ、ボランティアコーディネーターをしたり子ども食堂をしたり貴重な経験をたくさんさせていただきました。今では大阪市委託の専門療育をASDの子どもたちと関わるお仕事をしながら、TEACCHプログラム研究会大阪支部委員やキャンピズの理事もさせていただいています。

キャンピズ活動は残念ながらコロナの影響で停滞していますが、「再会」をきっかけにみなさまとさまざまな形で活動にご一緒できることを切に願っています。

キャンピズはぼくの人生を大きく変えてくれ、たくさんの学びを与えてくれました。それは行動すること、行動しなければ何も始まらないことを教えてくれたのです。そんなキャンピズの良さをいろんな人に味わってもらいたいのです。とくに自分の人生を変えたいと思う人にこう伝えたい。

「キャンプめっちゃええで」と。



特定非営利活動法人キャンピズ

理事 信達 和典

1. 出会いのきっかけ

大学1回生の終わりごろに、同級生のあるグループが参加しているボランティア活動が「めっちゃおもしろい」という話をしており、ボランティアに行ってみたく思うようになりました。

そのボランティア活動がキャンピズでした。今から約10年前に学生ボランティアとしてキャンピズに関わったことは私にとってかけがえのない体験となっています。

キャンピズに出会わなければ、自分らしく生きること、やりたいことに本気でチャレンジしてみることがなかったと思います。

2. 初めての活動

大学2回生になって、初めてキャンピズの活動に参加しました。感想を一言で述べるなら「衝撃」でした。障がいのある方と一緒にキャンプで1泊を共に過ごすことなんて当然初めて。それだけでも十分な衝撃でしたが、私にとっては学生ボランティアスタッフの動き・考え方・スキル・コミュニケーション能力など、本当に同年代の人たちなのかと大きな衝撃受けました。具体的には、参加者の特性に配慮したプログラムを学生主体で考えて進めていることです。また様々な役割を学生が担っており、司会進行責任者、金銭管理や物品管理の責任者、フリースタッフ、参加者のマンツーマンスタッフ、そのすべてが学生で成り立っていて、まさにキャンプ活動の力の源が学生ボランティアだったということでした。

3. 活動の中で

大学2回生から大学院卒業までの計5年間で、学生ボランティアとしてすべての役割を経験させてもらいました。そこで楽しい思い出も悔しい思い出もたくさんして自分自身すごく成長したと

感じています。

さらに同級生はもちろん、先輩、後輩、社会人スタッフや事務局の方、そしてキャンパーというかけがえのない仲間に出会えました。これは学生生活の中での私の一番の財産です。

4. 社会人になって

学生時代にキャンピズでもらったものを何か返すことができればと思い、社会人になってからもスタッフとして関わらせてもらっています。学生たちの思いを形にできるよう、キャンピズで活動出来て良かったと思ってもらえるよう微力ながら協力できるよう努めています。

5. 新たなるキャンピズへ

法人化して20周年。ここまで来れたのは、今までたくさんの人たちがキャンピズに賛同して関わってくれたからだと思います。またこの20年で多くの人財が育っており、直接かかわりのない世代とも繋がりを持てる機会も増えとても心強く感じています。そういった人たちの力が今後必ず必要になると考えています。いつでも帰ってこれる場所、ライフサイクルや家庭環境が変わっても長く関わり続けることができる団体を目指し、これから10年先、さらにその先にキャンピズが続いていくようしっかりと組織基盤を作っていきたいです。

20周年のテーマである「さいかい」をきっかけにして、たくさんの人たちの力を借りながら新たに動き始めていきたいと思っています。「キャンピズがあつて良かった」一人でも多くの人にそう思ってもらえるように頑張りたいと思います。

それではまたどこかでキャンプをご一緒できることを楽しみにしています。



キャンピズとの出会いとこれからの10年

特定非営利活動法人キャンピズ

キャンプディレクター 鍵野 立成

私とキャンピズとの出会いは、桃山学院大学社会福祉学科でのオリエンテーションキャンプでした。その時に班のリーダーをしていた先輩から「様々なところでキャンプができる。」「福祉について学べる。」「先輩や後輩と仲良くなれる。」とお話を聞き、魅力を感じたので参加しました。それから、グループキャンプをはじめ、夏キャンプ、スノーキャンプと様々なキャンプへ参加し、たくさんの方々と一緒にキャンプを楽しむことができました。

その中で特に思い出深いキャンプが大学1年生の時の10泊11日乗鞍でのキャンプでした。先輩から誘われ、「え、10泊11日ですか？楽しそうですね！」という一言がきっかけで参加することになりました。その時、私は、キャンプの経験や障がいのある方との関わりがなく、とても不安を感じながら参加しましたが実際、参加してみると言葉では表せないくらい楽しくて、楽しくて仕方ありませんでした。10泊中9日間、天候が悪く雨だったことも思い出の一つですが先輩方やキャンパーさんとの関わる時間が多く持つことができ、楽しくキャンプをすることができました。また、先輩方がディレクターという立場でキャンパーさんへプログラムを考え、提供している姿を間近で見て、「自分もあんな風にキャンプを作りたい！」と思い、今の私がキャンピズにおるきっかけになったと思います。

それから様々なキャンプのプログラム・マネジメントディレクターをさせてもらい、大学4年生では「キャンプディレクターになり、キャンパーさんと一緒に楽しいキャンプを作りたい！」と次の目標へと変わりました。昨年、ユニバーサルキャンプで初めてのキャンプディレクターをさせてもらい、いい経験をさせてもらいました。そして、私が思う「これからの10年」とは・・・。

私が思うこれからの10年とは、いつでも戻れる居場所作りだと思います。私自身がそうだったのですが大学を卒業して、約5年、仕事で時間がないにも関わらず、キャンピズへ参加をしているのは、私にとってこの場が癒しの場でもあるからです。大学生時代に出会ったキャンパーさんやスタッフの先輩・後輩・同期の方と会えるだけで笑顔になり、私自身、元気をもらっています。その人達だけでなく、これから参加されるキャンパーさんやスタッフとの出会いも楽しみにしています。そのためには、長く居続けることが大事だと考えており、私自身の成長の場とともにキャンピズを盛り上げていくことができればと思います。

最後になりますがこの度、キャンピズ20周年おめでとうございます。これからの10年、たくさんの方々との出会い、ともにキャンプをできることを心より楽しみに活動へ参加させていただきます。



自分とキャンピズ

特定非営利活動法人キャンピズ

キャンプディレクター 中嶋 祐二

自分は兄が既にキャンピズに参加していたということもあり、1回生の春からフィールドワーク等の授業を通してキャンピズのキャンプに参加しました。活動自体は楽しく参加していましたが、それまでに障がいのある方と関わったことはなく、活動の中でも「これって大丈夫なんかなあ」「キャンパーさん何考えてるか全然分からんなあ」と難しさを感じることもありました。しかしながらわからないなりに何回も活動に来て、キャンパーさんと時にもみくちゃになりながら関わっていく中で、少しずつキャンパーさんに名前を覚えてもらったり、キャンパーさんから声をかけられるようになったりと、活動を重ねるごとに楽しみが増えてキャンプが好きになり、自分の大学生活のほとんどをこのキャンピズの中で過ごさせてもらいました。

キャンピズでの活動を通して、わからないことや困ったことを相談できる同期、キャンプでもプライベートでも一緒にいて心の底から騒いで楽しめる先輩方や後輩たち、時に厳しくも自分たちの考えを引き出し、見守ってくれた社会人スタッフの皆さんと出会うことも出来ました。そしてこのキャンピズでの経験から「キャンプに関係した仕事がしたい!」と思い、今では子どもたちやボランティアの大学生たちと一緒にキャンプをする仕事をしています。

これからのキャンピズ

これからの10年、これまでは学生ボランティアとして活動していたメンバーが次は社会人ボランティアとして、今の学生ボランティアとまた新しいチームを創って活動に向かっていくことが出来ればと思います。そして今回の20周年事業の中で再び集まったこれまでのボランティアやキャンパーさんがまたキャンプに帰って来た時に「やっぱりキャンピズのキャンプって楽しい」と思える機会を創っていきたいです。まだまだ新型コロナウイルス等の影響など活動を進める中での課題はありますが、再開に向けて少しずつながら自身のこれまでの経験を活かして、またみんなでキャンプができる場所を創っていきたいと思います。

最後になりますが、20周年本当におめでとうございます。キャンピズに携わる皆さんとまたどこかのキャンプでお会いできることを楽しみにしております。ありがとうございました。

キャンピズ法人化20周年記念

デイキャンプ

テーマは **さいかい** 

CAMP WITH 2023

キャンピズ法人20周年を記念してデイキャンプを開催します
一緒にキャンプをしたキャンパーさん、ボランティアのメンバーと再会
そしてBBQ、クラフトコーナー、アクティブブース、音楽コーナー
キャンピズ神社、語らいの場などプログラム盛りだくさん！
キャンピズの20周年をみんなで祝いましょう

令和5年3月18日(土) 10:30~15:00
大阪市立信太山青少年野外活動センター
キャンプ場：オークサイト

※青少年の家ではなくキャンプ場での開催です。お間違いのないようお気を付けてください





キャンピズ法人設立20周年事業実行委員会

委員長 前田将太

法人設立20周年おめでとうございます。2022年9月より発足した実行委員会。大変有り難くも委員長に拝命いただき、記念キャンプなどを準備、運営してまいりました。

私がなぜ委員長なのか、わかりませんが自分の紹介も含めて、キャンピズとの関わりを書いておきます。初めの出会いは、2007年に桃山学院大学社会福祉学科のフィールドワーク（プチ実習）という授業でした。別の実習先の説明会に参加できず、当時キャンピズ代表であり本学の教授であった石田易司先生に相談し、キャンピズに丸め込まれたのが全ての始まりです。

19歳の私はまだ障がいのある方と関わった経験もほとんどなく、初めて自閉症のある方とのマンツーマンが4泊5日の淡路キャンプでした。入浴時、キャンピズ以外の団体（サッカー少年たち）が、突如入ってこられた瞬間、私の相手が大きい声を発しました。その時私は何が起きたか分からず、本能で相手の顔の近くで「大丈夫、大丈夫、カラダ洗って出よか。」と声を掛けたのを覚えています。そうするとその相手が落ち着きを見せてくれて、何事もなく浴室を出ることができました。この時、障がいについて全く理解も無い状態で一瞬混乱しましたが、この人が「何か困っている」というのは分かり、何か伝えようと思えば、障がいがあるかと伝わるのだと感じました。ここでの経験が、「障がいって何なんだ？」と考え始める、そして今後のキャンピズと関わり続けたいと思うキッカケでした。

周年事業に戻しますと、お話自体は理事の西川さんからの依頼からで、二人で話し合い委員を選出し依頼をしました。みなさん仕事や子育て、遠方住まいという理由から21時以降ZOOMで、10回ほど会議を重ねました。満遍なく年代を分けていましたが、年齢差最大20歳ほどもあるメンバーもいるなか、キャンピズの周年を盛り上げようと多くのワクワクする意見が集まり準備が進みました。

記念キャンプ前泊は実行委員の他、コアなメンバーが集まっていたいただき、準備をして、久しぶりにお酒を交わしたことは、盛んにキャンプを行っていた頃のキャンピズを思い出して楽しい時間でした。当日は雨がどうなるか不安でしたが、集合時間には雨が上がり、多くの方に参加いただきました。キャンパーさん（これまでのキャンプ参加者）も懐かしい顔を見せていただき、また当時学生でボランティアをしていた方々が、子どもやパートナーと来られ、そんなみんなが一緒の空間にいる、その空間に何かほっこり。印象的だったのはこちらで準備した訳ではない水たまり！多くの子どもが、ドロドロになりながら遊んでいたのが、キャンプらしいというか、遊びができるというか、そんなキャンプの神髓的なものを見た気がします。参加された皆様どうでしたか。楽しんでもらえていたら嬉しいです。

記念キャンプのテーマが「さいかい」でした。多くのさいかいがあったのではないのでしょうか。本事業を通して、キャンピズが持つ「人のチカラ」、「可能性」、「繋がり」を感じることができました。新しい未来に向けて今回の企画では、キャンピズの新ロゴも決定し、今後の活動に使用していきますので、乞うご期待です！

現在キャンピズはコロナの影響でキャンプ活動がストップしていますが、今回の記念事業を機に活動をアクティブにポジティブにワクワク進めるキッカケになってくれていれば、実行委員長として嬉しい極みです！今後のキャンピズに期待します！

最後になりますが、本事業では多くの方々、団体からご寄付とご協力をいただき感謝申し上げます。そして実行委員の皆様、キャンピズ本部の皆様、信太山野外活動センターの皆様、ありがとうございました！

20周年事業実行委員紹介



副実行委員長
ノベルティ担当
中野 あゆみ

キャンピズでの思い出は本当にいっぱいあって、色々な人に出会って、たくさんの経験をさせてもらいました。大学生の頃は週末の家かというぐらいキャンプ場に来ていました。

今回、実行委員という形でキャンピズの「さいかい」に関わって、とっても嬉しく思っています。途中、仕事が忙しい時期や、引っ越し、子どものこと、キンプリの脱退発表など、「もう無理～」と思う時もあったけど、久しぶりにみんなでわいわい準備ができて楽しかったです。子どもたちも含め、家族の協力もあって最後までやりきることができました。またこれからもみんなで一緒にキャンプができることを楽しみにしています。みなさん、本当にありがとうございました！！

自分の福祉の原点であるキャンピズ。最初はフィールドワークでの参加。先輩にクソ怒られた記憶が昨日のこのように夢にまででます。グルキャン、伊賀キャンプ等々、社会人としても社会福祉士としても、あの経験なくして今の自分はなかったかと。

それから18年がたち、キャンピズ法人化20周年「さいかい」に携わることができて光栄です。

さいかいできたキャンピズの仲間たちと、今後のキャンピズの発展に貢献できれば最高です。さいかいからのさいこうです。



プログラム担当
寺岡 正頂(てら)

法人化20周年、おめでとうございます。このような記念の時に実行委員として関われることを大変嬉しく思います。私にとってキャンピズは、大学生活の中で一番楽しんだ思い出も一番悩んだ思い出もある、本当にいろんなことを経験させてもらった場所です。活動の中でどうすればいいキャンプになるのか、皆と意見を出し合い、時にはぶつかって悩みながらも考え、キャンプを作った経験は仕事で野外活動に取り組んでいる今の自分にも強く活かされています。

これからまたキャンピズが動き出していく中、自分もまたスタッフとしてキャンパーさん、運営スタッフの皆さんと全力で楽しいキャンプを創っていきたいと思います。皆さん、本当にありがとうございます。そしてこれからもよろしくお願ひします！



プログラム担当
中嶋 祐二

授業の一環として始め、大学時代のライフスタイルの一部となり、職場となり、今でも大切な場所のひとつです。

たくさんの思い出の詰まった場所であり、大切な仲間とともに成長した場所です。

そんなキャンピズが20周年を迎えました。当日は残念ながら参加できませんでしたでしたが、企画に携われたこと誇らしく思います。

30周年となればぜひ参加できるように、みなさんとお会いできることを楽しみにしています。



ノベルティ担当
水井 広起(ひろ)



広報担当
信達 和典
(しんちゃん)

学生時代から社会人になってもずっとボランティアとしてキャンピズにかかわってきました。その月日10年間。振り返るとあっという間だと感じていますが、人生の中で10年も継続してやって来たことはキャンピズ以外にありませんでした。なぜ長い間継続できたかを考えてみると「たくさんの人とのつながり」ではないかと思っています。このつながりに私は何度も助けてられました。

今回、実行委員として関わらせてもらいましたが、公私ともに今まで一番忙しく、何もできていませんでした。しかし他の実行委員のみんなに迷惑をかけながら助けてもらいながら何とか最後まで務めることができました。改めて人とのつながりの力に「さいかい」したと感じています。

キャンピズ法人化20周年記念事業デイキャンプをきっかけにして、再び協力してくれる人、新たにキャンピズに協力してくれる人がいれば、とっても嬉しいことだなと思います。みなさんありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします！

実行委員長のしょーたさんから「おもしろい記念事業を一緒につくろう」とお誘いを受け、10年ぶりにキャンピズに参加しました。新ロゴを担当することに決まった時、ちゃんと企画としてカタチにすることはできるのだろうか、私で務まるのだろうかと不安もありましたが、支えてくれる同期メンバーのおかげで、無事に新ロゴマークを決めることができました。同期メンバー、本当にありがとう。

天気が心配でしたが、先輩・後輩、キャンパーさんに久しぶりにお会いすることができて、本当に嬉しかった！初めて話す方ももちろんいましたが、みなさんすごくフレンドリーで。楽しい時間はあっという間でした。

今回デイキャンプを実施することができて、本当に本当に良かったです！めっちゃ楽しかった！またみんなでキャンプできる日を楽しみにしています。ありがとうございました！



新ロゴ担当
福井 沙由莉
(りんご)

ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。そして一緒にデイキャンプを作り上げた実行委員のみんな、本当にありがとう。

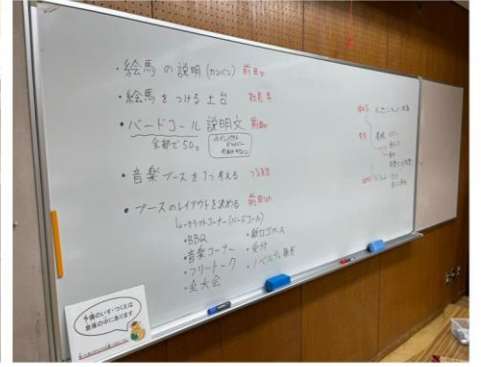
私の雨男っぷりが本当に心配でした。10泊11日中、9泊10日雨だった経験を持っていますので、大丈夫かと思っていたら案の定の天候で、どうなるものかと思いましたが、110名を超える参加数に一安心。水たまりも子どもたちにとって、最高の遊び場に変わっていて、これぞキャンプの楽しみ方と笑顔になりました。

色んなプログラムがありましたが、キャンピズ神社はほんとに凄かった。こんなんしてと提案したのは私でしたが、予想の何倍もの完成度で、「おもしろいこと」に本気で取り組める彼らのバイタリテイが今も健在で最高でした。またみんなでキャンプをしましょう！本当に、本当にありがとうございました。



記念誌担当
西川 正人
(しゃちょう)

フォトギャラリー





フォトギャラリー





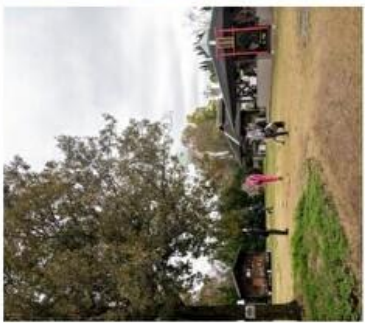
フォトギャラリー





フォトギャラリー





結果発表



酒井律子さん

新ロゴのデザインは全6作品の応募の中から、酒井律子さんの作品に決定いたしました。今後、新・旧ロゴは併用して様々なところで使用していきます。

フォトギャラリー&メッセージ

20周年☆
おめでとうございます！

20周年おめでとう
チャプチェ

キャンピズ20周年☆
たくさんの人たちの笑顔
であふれるキャンピズに
出会えて幸せです。これ
からも楽しいキャンピ
と出合いを楽しみにして
います。
かな

久しぶり！
たのしむぞー！！

今日はキャンピングして
くれてありがとう。
楽しかったよ！
リヨウスケ

20周年おめでとう
ございます！
益々の発展に向けて
いろいろお手伝いさ
せてください！！応
援します。

たくさんファミリー
キャンプやイベントが
できますように☆



キャンピズ20周年
おめでとうございます。
バニラ

20周年
ばんざい！！

20周年おめでとう
ございます！
今後も関わり続けたい
と思っております。
よろしくお願いたします。
鏡野

20周年おめでとう
ございます☆

20周年おめでとう
ございます！
50周年目指してが
んばりましょう！

キャンピズ
ありがとう
伊豆

キャンピングが
たのしみ

キャンピズ20周年お
めでとうございます！！
今日はみなさんと久し
ぶりに会えて嬉しかっ
たです♪
スイミー

またみんな海外キャンピ
したいなあ～！！
ファミリーキャンプも！(笑)

本当に20年も続け
て感無量です。
次の10年、20年
をめざしましょう。生駒

20周年おめでとう！！



いつもありがとう
こまちゃん

20周年おめでとう
ございます。
これからのキャン
ピングもどんどん
盛り上げてい
きましょう！
かねやん

いつもありがとうございます
宿泊！！
たのしみにしています
こま

ぼくもキャン
ピングするぞ！

色々な方にお世話
になりました。
またよろしくお願
いたします。
いず

CampWith 20周年
おめでとうございます！

キャンピズ20周年、
おめでとうございます。
こういつた機会を設け
て頂けて嬉しみに
会えて嬉しいです。
また集まりたいなあ～。

設立趣旨書

特定非営利活動法人 キャンピズ

私たちは長い間、いろいろな人たちとキャンプ活動を行ってきた。そして、その活動の中で、私たちはたくさんの人と出会い、たくさんの方のことを考え、たくさんの方の感動を受け、たくさんの方の仲間を得た。

まもなく 21 世紀を迎えようとする現在、高齢社会の到来、青少年の非行化や不登校の問題など、私たちの周囲は決して明るい話題ばかりではない。私たちはこのような状況の中、キャンプを通じて、人と人が信頼し合い、お互いに助け合って生きて行けるような社会を実現したい。

そのため、特定非営利活動促進法に基づく法人格を取得することにより活動基盤を充実させ、障害の有無、性別、年齢の区別なく「Camp With～キャンピズ」の名の下に、よりたくさんの方が集い、たくさんの方のことを分かち合えるよう、そして真に人間味あふれた、より住みやすい社会の実現に寄与するためにこの法人を設立する。

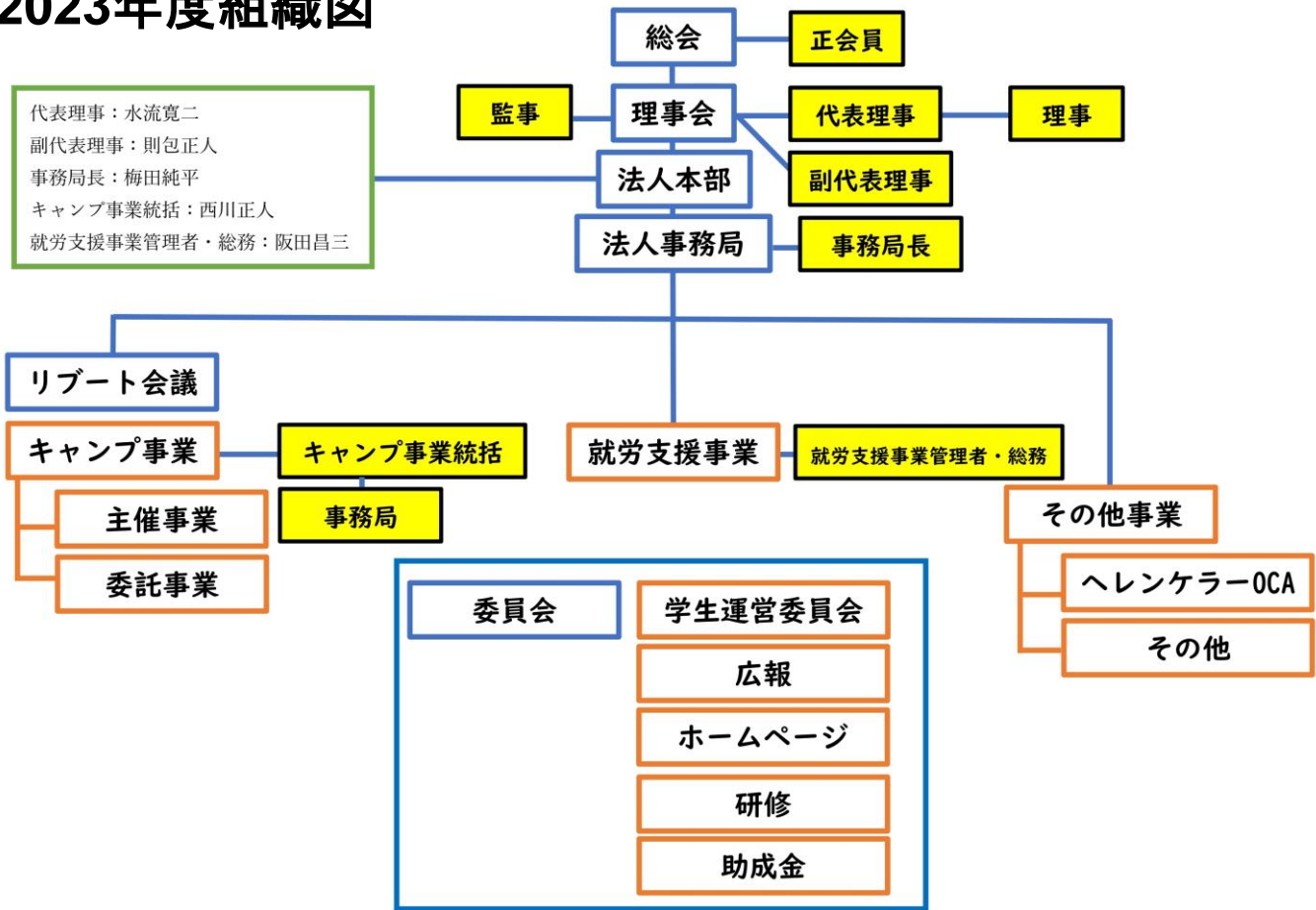
法人概要

法人名	特定非営利活動法人キャンピズ
所在地	〒540-0012 大阪市中央区谷町2丁目2-20 2階 市民活動スクエアCANVAS谷町(大手前類第一ビル)
代表理事	水流 寛二
事業目的	この法人は、キャンプを主たる活動として、障害の有無、性別、年齢の区別なく人と人が信頼し合い、お互いに助け合って生きていける社会を実現することを目的とする。
事業内容	①キャンプによる交流事業 ②キャンプ指導者養成事業 ③キャンプに関する調査研究事業 ④キャンプに関する出版事業 ⑤キャンプ指導者派遣事業 ⑥障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく障害福祉サービス事業 ⑦その他目的を達成するために必要な事業
URL	http://campwith.jp/
Facebook	https://www.facebook.com/campwith/
設立	2002年(NPO認定)

会員種別

会員種別	内容	費用
キャンピズ・クラブ	キャンパー（参加者）として活動に参加する方	3,000円
キャンピズ・メイト	スタッフ（ボランティア）として活動に参加する方	3,000円
キャンピズ・メイト （学生）	スタッフ（ボランティア）として活動に参加する学生	500円
キャンピズ・正会員	キャンピズの社員として参加する方（総会の議決権をもちます）	5,000円
キャンピズ・賛助会員	経済的にキャンピズの活動をご支援頂く個人・団体	一口5,000円

2023年度組織図



2023年度役員一覧

役職名	氏名	担当
代表理事	水流 寛二	
副代表理事	則包 正人	
理事	阪田 昌三	就労支援事業管理者・総務
理事	新井 純一	
理事	梅田 純平	事務局長
理事	西川 正人	キャンパス事業統括
理事	畠中 稔生	
理事	金本 拓也	
理事	信達 和典	
理事	中野 あゆみ	
理事	寺岡 正頂	
理事	前田 將太	
監事	生駒 荘太郎	

あなたも チャレンジしてみませんか？



2020年4月1日 芦屋市伊勢町へ引っ越ししました。



就労継続支援B型事業所 **ウイズ芦屋**
(事業所番号 **2811000484**)
2017年6月1日 兵庫県指定

Activities



お菓子の箱作り、ナッツ類計量・充填、
サプリメント計量・充填、ペットの餌計量・充填



- ・店舗・ネットで販売してるもの
- ・一人ひとりの役割分担がある
- ・わかりやすい仕事内容

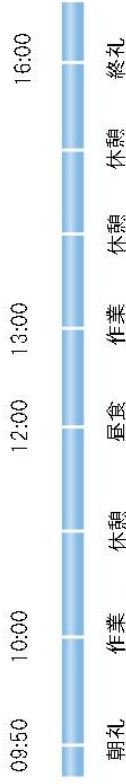
食品を取り扱うのでユニホームを着用します。

Business Overview

就労継続支援B型事業所とは

- ・働きたいけど…いきなり一般企業に就職するのは不安がある方
- ・一般企業等の雇用に結びつかない方
- ・働くことを希望しているが就労移行・A型事業の前に利用と思っただ方が雇用契約を結ばずに働く場所を提供するところです。

Schedule



時給 **200円**～
交通費支給
(条件あり)

作業は1日4.5時間、1時間ごとに休憩10分をとります。
昼食時間は買い物や外食に行くことも出来ます。

Service flow



Access

阪神芦屋駅から
徒歩10分



〒659-0052
芦屋市伊勢町4番21号

0797-23-0380

編集作業に時間がかかり、気が付けばその間に第二子が誕生し、長女は4歳になりました。20周年記念実行委員会、記念誌担当キャンプネーム「しゃちょう」こと西川正人です。

寄稿いただいた皆様、完成を待ち望んでくださっていた皆様、大変お待たせいたしました。今回の記念誌作成においてご協力下さった皆様、誠にありがとうございました。

本来の完成予定から遅れること9ヶ月ようやく完成にたどり着けました。単純に私の作業スピードが遅かったのが一番の原因ですが、6割から7割ほど完成したある時、編集作業中下の様なエラーが出たのです。

SMART機能でエラーが検出されました。1:Seagate ST2000DM001 (PM)

警告：すぐにデータをバックアップして、交換してください。
ハードディスクドライブ。故障が発生する可能性があります。

<F1>キーを押すと、継続します。

故障する可能性というか、故障しました。復旧も全くできず、クラウドに保存もしておらず全て一からやり直しという絶望的な状況に…。まあただの言い訳ですが、ど素人が作ったにしてはいいものできたかな？と思うので許していただけると幸いです。

さて今回、記念誌作成にあたって「虹」をテーマというかイメージにして作成しました。表紙、裏表紙の図形の色を7色に、各章の帯の色もこれに準じています。そして最後のにじの歌詞の帯は虹色に。「にじ」がキャンピズのテーマソング的な存在であることも理由のひとつですが、私がキャンピズの活動にどっぷりとはまるきっかけとなった2004年度伊賀ステップキャンプ、ここで見た虹の光景が今でも忘れられず、これをイメージにしようと思ったからです。

どんな虹だったか。ふたつあるのですが、ひとつは10泊キャンプ中、2日たっても3日たってもご飯も食べず、一步もコテージから出てこないA君。このままではまずいと、石田先生がどうにか外に連れ出して、川のほとりに行くとA君はズボンを脱いで大きな放物線を描いたのです。するとそこには虹が。そんな彼ですが、その後もずっと10泊キャンプに参加してくれて、そのたびに少しづつ心を開いていってくれたのです。

もうひとつは5人で車いすを担いで登った霊山。汗だくになって登りきった山頂ではなんと虹が二重にかかっていたのです。

私は今のところ、これに勝る虹を見たことはありません。この虹があったから、今でもキャンピズの活動を続けているんだろうなと思います。そしてこれから先、このふたつを超える虹に出会える場所もきっとキャンピズなんだろうな…。そして、そんな素敵な思い出を皆様にもお届けできるような団体でありたい、そんな思いを込めて作った記念誌、皆様にも楽しんでいただけていたら幸いです。

法人化20周年記念誌企画・編集担当
西川 正人



(オリジナル・キー F) に じ

新沢としひこ 作詞
中川ひろたか 作曲



にわのシャベルが いちにちぬれて あめがあがって くしゃみをひとつ
 せんたくものが いちにちぬれて かぜにふかれて くしゃみをひとつ
 あのこのえんそく いちにちのびて なみだかわいて くしゃみをひとつ



くもがながれて ひかりがさして みあげてみれば } ラララ
 くもがながれて ひかりがさして みあげてみれば }
 くもがながれて ひかりがさして みあげてみれば }



にじが にじがー そらにむかって きみのきみのー きぶんもはれて



きっとあしたは いいてんき きっとあしたは いいてんき





特定非営利活動法人キャンピズ法人化20周年記念誌

発行日／2024年3月吉日発行
発行／特定非営利活動法人キャンピズ
企画・編集／西川正人
編集協力／新井純一
キャンピズ法人本部
20周年記念実行委員会
印刷・製本／株式会社イタミアート

~20th anniversary~

